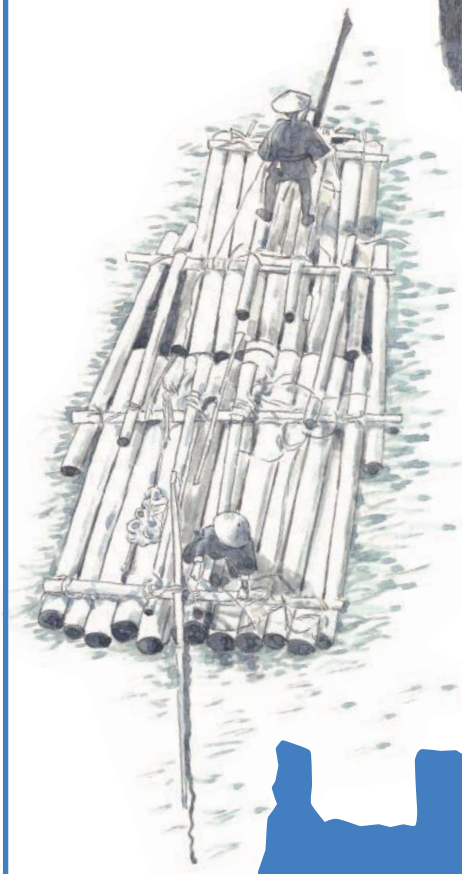
1954



みのかものうつりかわり

みのかも文化の森
美濃加茂市民ミュージアム

2022

はじめに

小学3年生が社会科「市のうつりかわり」の中で美濃加茂市の移り変わりについての文化の森で学習を行います。その学習内容に合わせて「交通のうつりかわり」「村と町が集まって美濃加茂市ができた」、「みのかものいろいろなくらし」、「道具のうつりかわりと今」に関わる資料をまとめました。美濃加茂市は昭和29年（1954）に市になりました。そのため、昭和30年代以降の移り変わりを中心に、その前の時代となる明治時代、大正時代の出来事も含めた内容をこの冊子にまとめました。

そして、この資料や年表と、ご自身の歩みを重ねていただければと思います。

郡是製糸の作業風景（昭和10年頃）

餅つき（昭和37年12月28日　佐野一彦撮影）

太田小学校の校庭（昭和39年）

川合の渡し（昭和50年頃）

目次

・はじめに

・凡例

A. 交通のうつりかわり

１．鉄道ができて駅ができた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １

２．街道が道路になり、渡しが橋に変わった・・・・・・・・・・・・・・・・ ３

３．みのかもの観光・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ５

B. 村と町が集まって美濃加茂市ができた

１．郡・村・町から市へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ６

２．学校や公共施設ができた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７

３．みのかも小学生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）

１．川の近くのくらし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

２．農家のくらし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

３．工場のうつりかわり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

４．人がたくさん住むところ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

D. 道具のうつりかわりと今

１．明かりの道具のうつりかわり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

２．洗濯の道具が変わった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

３．食事が変わった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

４．みのかもの年中行事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

５．昔のくらしの知恵・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

・おわりに

■付録：さまざまな「みのかものうつりかわり」の年表

凡例

■この冊子は、小学校3年生が学習する社会科「市のうつりかわり」の内容に関する資料などをみのかも文化の森/美濃加茂市民ミュージアムがまとめたものである。あわせて、地域・防災学習室の「みのかものうつりかわり」を学習する際の参考となるものである。

■本書に掲載されている写真は、特にことわりのない限り美濃加茂市が所有しているものである。

■「注目ポイント☞」は、本文、資料をもとに読み解いて欲しい内容を明記したものである。

■本書の編集は、可児光生(美濃加茂市民ミュージアム館長)が行い、本文を美濃加茂市民ミュージアムの渡辺崇、石田真未、甲斐規予子が執筆した。

A. 交通のうつりかわり

鉄道や舗装された道路が出来る前は、街道を徒歩や馬を使って移動し、ものを運んでいました。また、木曽川、飛騨川に橋が架かるまでは渡船が使われていました。

鉄道は多くの物資や人を運ぶことができる交通機関です。大正10（1921）年に高山線の開通と美濃太田駅の開業によりこの辺りの交通機関は大きく変わりました。それまでは、街道を人力車か乗合馬車・乗合自動車・タクシーなどで移動していました。明治20年代に入ると荷車の普及に伴い、各道路の改修が行われました。また、木曽川や飛騨川を渡って馬車やトラックが自由に往来できるようになったのは、昭和2（1927）年に太田橋、青柳橋が架けられてからでした。

美濃太田駅（大正10年）
開業直前の美濃太田駅、駅前広場に砂利を敷き整備している

1. 鉄道がきて駅ができた

当時の人々にとって鉄道が開通し駅が出来ることは念願でした。大正10（1921）年11月12日に美濃太田駅が開業したときは多くの人で混雑したと言われています。その後、美濃太田駅には、越美南線（大正12（1923）年開通）、太多線（昭和3（1928）年開通）が集まり、特急が停車する地域の重要な駅となりました。また、川合町には車両基地などが置かれています。

現在、美濃加茂市内を走る鉄道路線は上記の3線ですが、このうち越美南線は、国鉄から分離され、昭和61（1986）年から長良川鉄道として運行しています。（国鉄は昭和62（1987）年に民営化してJRとなりました。）

道路が整備され自動車での移動が増えた影響から、美濃太田駅の乗客数は昭和41（1966）年の1日平均、5817人をピークに利用者が減っています。

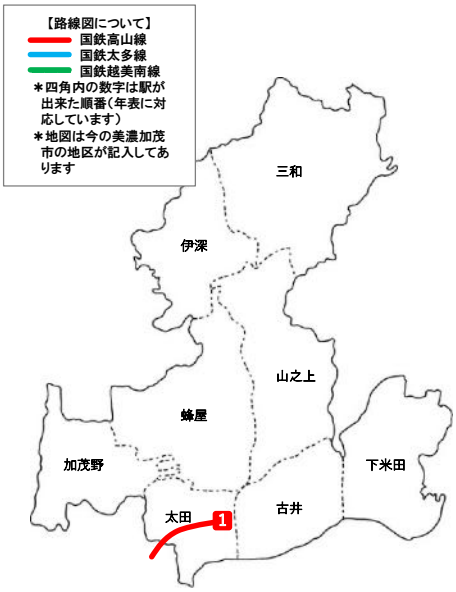
古井駅（大正11年）古井駅の開業を祝う

美濃太田駅（昭和44年）蒸気機関車の最終運転お別れ式

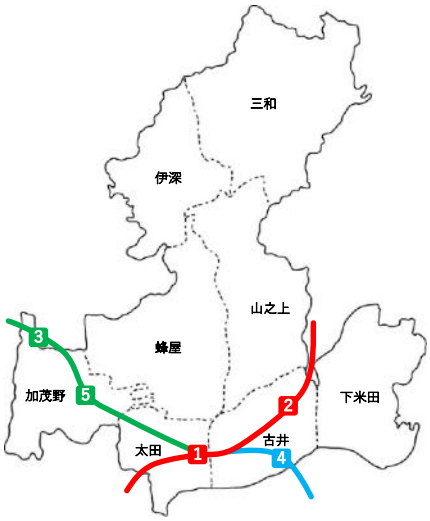
美濃太田駅（昭和45年）撮影：渡辺誠治氏

長良川鉄道営業開始（昭和61年）
越美南線が長良川鉄道として運行をはじめた

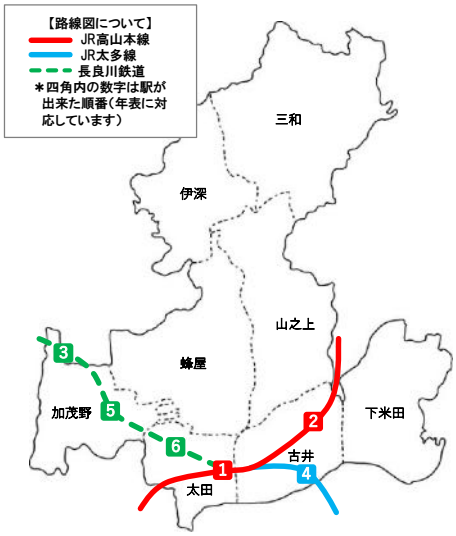
路線のうつりかわり



大正10(1921)年
美濃太田駅開設当初



昭和27(1952)年
美濃川合駅、加茂野口駅が開業



昭和61(1986)年
長良川鉄道が運行開始

コラム：駅弁「松茸の釜飯」

駅弁とは駅で売られている弁当のことです。かつては駅のホームで乗客が電車の窓を開けて買い求めていました。JR美濃太田駅では向龍館の「松茸の釜飯」という名物駅弁が昭和34（1959）年から、令和2（2020）年6月1日まで販売されていました。1980年代頃は多い時に1日で300~400個売れていたそうです。

当時は駅のホームで立ち売りをする姿も見られました。また、お弁当の容器が陶器で作られた時代もあり、釜だけではなく舟や桶といった一風変わった形のお弁当が売られていました。

駅弁（令和2年）最後に売られていた駅弁「松茸の釜飯」

駅弁の容器（昭和50年頃）
陶製の「松茸の釜飯」の容器

舟形の駅弁の容器（昭和50年頃）

美濃加茂市の鉄道年表

明治

大正

大正10（1921）年　❶高山線が美濃太田駅まで開通し、美濃太田駅が開業する
大正11（1922）年　❷古井駅が開業する
大正12（1923）年　越美南線の美濃太田・美濃間が開通し、❸加茂野駅が開業する

昭和

昭和3（1928）年　太多線が開通する
昭和7（1932）年　美濃太田駅西北に美濃太田機関庫が設置される
昭和9（1934）年　高山線が全通する

20

昭和27（1952）年　太多線の❹美濃川合駅が開業する
越美南線の❺加茂野口駅が開業する

昭和29年 美濃加茂市 誕生

40

昭和41（1966）年　川合町に美濃太田気動車基地が設置される
乗降客数のピーク（1日平均：5817人）
昭和44（1969）年　高山線すべての列車がディーゼルに切り替わる

60

昭和61（1986）年　国鉄越美南線が廃止され長良川鉄道が営業開始❻前平公園駅が新設される（加茂野駅が富加駅、加茂野口駅が加茂野駅に駅名が変更される）
昭和62（1987）年　国鉄の民営化に伴い、JRが発足する

平成

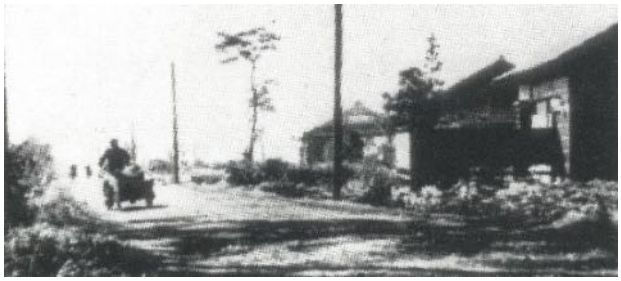
平成10（1998）年　美濃太田駅が改築され橋上駅舎となる
自由通路が開通する

令和

令和2（2020）年　向龍館「松茸の釜飯」販売終了

2. 街道が道路になり、渡しが橋に変わった

国道41号（昭和37年）古井地内を通る国道41号



川合新道（昭和20年代）昭和42年に国道41号となった道路

美濃加茂市を通る主な道は中山道・関街道・山之上街道・飛騨街道などでした。明治20年代に入ると、物資の流通が激しくなり荷車が普及したため、各道路の改修が行われました。大正時代も道路の改修、橋の建設が進み、輸送する物の量が増えたため馬車輸送が盛んに行われました。

昭和になると道路の改修に合わせて鉄橋の建設も行われました。それまで木造であった青柳橋が昭和2（1927）年に鉄橋になり、同じ年に太田橋がつくられました。昭和30年代になると自動車交通の急激な発達により国道41号線の改修（昭和42（1967）年舗装が完成）が行われ、中濃大橋（昭和44（1969）年）もつくられました。

今では国道41号、21号、248号、418号などが通る交通の要です。また、高速道路である東海環状自動車道が美濃加茂市内を通るようになりました。現在も市内の各地区を結ぶための道路や橋、トンネルの建設や改修が進められています。

渡船から鉄橋へ

太田橋ができるまでは、木曽川をはさんで対岸との交通は渡し船を使っていました。明治30年代に入ると、街道を往来する人、荷車や荷馬車の増加によって太田の渡しは大変混雑しました。その後も輸送量は増え続け、昭和2(1927)年に馬車やトラックも往来できる太田橋をつくりました。現在では太田橋に加え、中濃大橋（昭和44（1969）年）、川合大橋（昭和51（1976）年）、新太田橋（昭和58（1983）年）が架けられています。

飛騨川では明治24（1891）年に木製の青柳橋が出来るまで渡船を使っていました。昭和2（1927）年に車も通ることができるアーチ型鉄橋に架け替えられました。その後、青柳橋の南側に新青柳橋（昭和46（1971）年）が架けられました。そして、青柳橋の隣に青柳大橋（平成9（1997）年）がつくられ、アーチ型の青柳橋は撤去されました。

木製の青柳橋（大正11年）

太田橋（昭和２年）

青柳大橋（奥）と旧青柳橋（手前）（平成9年）

荷車、馬車から自動車へ

明治中期に各地の道路が改修され、道幅が広くなるとともに荷車や荷馬車が増え、人力車が重宝されるようになりました。大正になると馬車から自動車に代わって行き、乗合自動車やタクシーが使われるようになりました。昭和になるとバスの利用者が増え市内各所に路線が増えていきました。しかし、昭和40年代以降は自家用車の普及にともない、バス路線は徐々に減少していきました。平成12（2000）年にコミュニティバス「あい愛バス」が運行を開始し、市民の足として市内各所を結んでいます。

馬車（大正時代）

自動車（大正8年頃）
郡是製糸で送迎などに使われた

バス（昭和34年）美濃太田駅前路線バス

車の保有台数と道路の舗装

車の保有台数が増えたことにより道幅が広くなり道路の舗装もすすめられました。昭和29（1954）年の美濃加茂市内の道路は602.89kmありましたが、舗装された道はわずか0.09kmでした。令和2（2020）年になると市内741.5kmの道路のうち、559.8kmが舗装されています。また、昭和29（1954）年から令和2（2020）年までの間に道路が100km以上延長されました。

国道21号舗装工事（昭和30年）現在の太田本町1丁目交差点付近

道や橋についての年表

明治

明治時代以前	主な街道である、関街道・山之上街道・中山道・飛騨街道が使われていた
明治時代	街道の改修工事が行われる
明治24（1891）年	木製の青柳橋がつくられる
明治20年代後半	荷車が普及する
明治35（1902）年	岡田式渡船が太田の渡しに岐阜県で最初に採用される
明治40年頃	乗り合い馬車（下麻生・太田・鵜沼間）が使われる

大正

大正6（1917）年	乗合自動車、タクシーの営業が始まる。また、人力車が増加する
大正時代	道路の改修や橋の建設が進み、馬車輸送が増加する

昭和

昭和2（1927）年	太田橋が完成する（岡田式渡船が廃止される）
	青柳橋が鉄橋に架け替えられる
昭和10年頃	荷馬車とトラックが輸送に使われるようになる

20

昭和26（1951）年	バスの営業（上麻生-太田間）が始まる
昭和20～30年代	バス路線が増える

昭和29年 美濃加茂市誕生

40

昭和32（1957）年	太田-坂祝-稲辺方面のバスが開通する
昭和35（1960）年	名古屋へのバス運行が始まる
昭和36（1961）年	国道248号の改修工事が始まる
昭和30年代	国道21号線の舗装工事がすすめられる

60

昭和42（1967）年	国道41号の全面舗装が完成する
昭和43（1968）年	青柳橋の補修工事が終わり全面開通する
昭和44（1969）年	中濃大橋が完成する
昭和45（1970）年	バスの本数が減少する
昭和46（1971）年	新青柳橋が完成する（青柳橋の南側）
昭和51（1976）年	川合大橋が完成する（川合の渡しが廃止される）
昭和58（1983）年	新太田橋が開通する

平成

平成9（1997）年	青柳大橋が開通する
平成12（2000）年	「あい愛バス」の運行が始まる
平成17（2005）年	東海環状自動車道が開通する
	美濃加茂インターチェンジ・サービスエリアが開業する

令和

自家用車の保有台数

年	保有台数
大正9(1920)年	5台
昭和29（1954）年	338台
昭和41（1966）年	2,828台
昭和50（1975）年	11,998台
昭和60（1985）年	20,300台
平成2（1990）年	26,545台
平成12（2000）年	37,870台
平成22（2010）年	43,210台
令和元（2019）年	48,187台

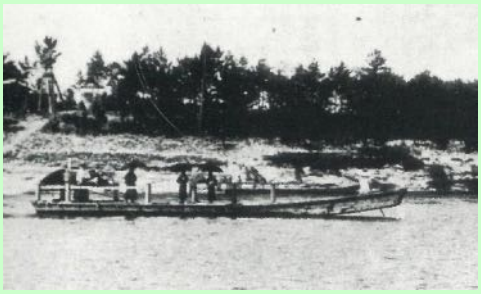
大正9年 加茂郡勢要覧
昭和29・41年 加茂自家用自動車組合（「美濃加茂市史」）
昭和50～令和元年 令和2年度版「美濃加茂市統計書」より

コラム：渡船について

美濃加茂市は木曽川、飛騨川という大きな川が流れています。太田橋、中濃大橋、新青柳橋、川合大橋ができるまでは、船を使い対岸まで渡っていました。渡船は洪水や暴風雨などによる増水時には船を渡すことが出来ませんでした。

明治30年代になると太田の渡しは輸送や往来する人々が急増したため、明治35（1902）年に天候にあまり左右されず、多くの人やモノを運ぶことが出来る「岡田式渡船」を設置しました。その後は増水による通行止めも少なくなり、昭和2（1927）年に太田橋が出来るまで使われました。

昭和51（1976）年に川合大橋が出来たことで、木曽川最後の県営渡船が役割を終え、その姿を見ることができなくなりました。



太田の渡し（明治44年）
岡田式渡船：両岸にやぐらを組み鋼鉄線を渡し、滑車により対岸に舟を導く仕組み

川合の渡し（昭和50年頃）　木曽川最後の県営渡船

3. みのかもの観光

人の移動・商業と観光

美濃加茂市域は、街道や川を用いた人の交流と物の流通が盛んに行われるところでした。周辺から人が集まり商業も発達しました。中山道と美濃太田駅から発展した太田の商店街、飛騨と八百津方面の分岐点として栄えていった古井・森山商店街などです。交通網が整っていることは、観光にとっても好都合で、近郊からまた遠隔地から多くの観光客が美濃加茂を訪れます。

美濃太田駅前商店街(昭和47年)

ライン下り

リバーポートパーク

重要文化財　旧太田脇本陣林家住宅

川とみちの観光

昭和の初めのころに始まった木曽川の「日本ライン下り」は、市域から犬山までの渓谷美を楽しむ舟下りです。地理学者の志賀重昂（しげたか）（1863～1927）が、犬山城を望む木曽川の景観をドイツのライン川に似ていると言ったことからこの名称が付けられました。昭和38（1973）年、流域が飛騨・木曽川国定公園に指定されたこともあって観光客が急増し、昭和40年後半には全国から年間約50万人を呼び込むほどになりました。しかし、その後旅行スタイルの変化などもあって観光客は減少の一途をたどり、ライン下りは平成25（2013）年から休止となりました。その乗船場だった場所は、現在「リバーポートパーク」として生まれ変わり、身近に川のアウトドアや食事を親しめる空間となっています。

美濃加茂市はかつて中山道太田宿を置かれ、多くの旅人を受け入れてきました。現在は当時の街並みはほとんど姿を消してしまいましたが、国の重要文化財林家住宅脇本陣や本陣跡があり、当時の面影をしのぶことができます。脇本陣に隣接する「中山道会館」とともに歴史を楽しむ観光客が訪れます。

里山でくつろぐ

自然環境を生かした公園の観光も美濃加茂市の特徴の一つです。市中央部の山之上地区の丘陵地には、平成15（2003）年に岐阜県営都市公園「日本昭和村」が開園しました。平成30（2018）年には「ぎふ清流里山公園」とリニューアルされ、広大な敷地に点在する建物をめぐりながら多彩な里山体験を楽しむことができます。そのほか、北部の「健康の森」、東部の「さくらの森」なども市内外の人々で賑わっています。

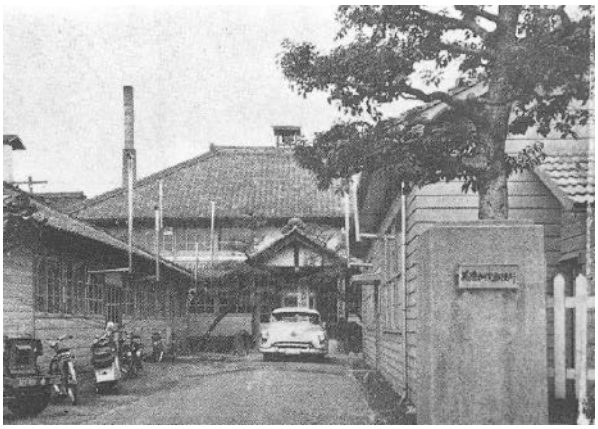
清流里山公園

さくらの森

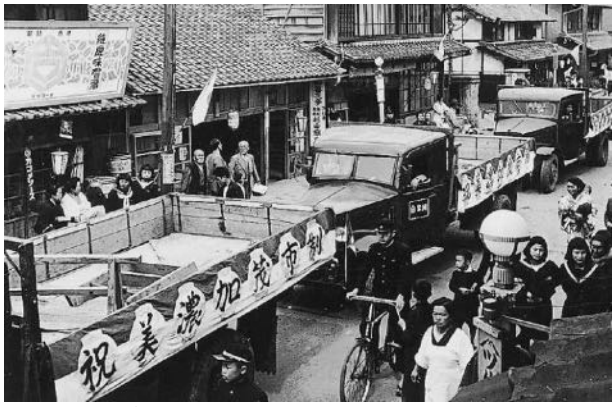
B. 村と町が集まって美濃加茂市ができた

昭和29（1954年）年4月1日、「美濃加茂市」が誕生しました。合併申請当時の人口は31,629人（昭和29年9月30日）でした。現在、令和3（2021）年の美濃加茂市の人口は57,184人になり、約1.5倍に増加しました。

美濃加茂市ができた当時、市役所は旧太田役場が使われていました。学校は木造で、現在と違う場所にあった学校もありました。また、大きな図書館や博物館などの公共施設はありませんでした。こういった公共施設は市民の文化活動の拠点となる場所の必要性から建てられました。



美濃加茂市役所（旧・太田町役場）（昭和29年）
当時市役所だった建物、現在は御代桜の倉庫として使われている



市制祝賀行事（昭和29年）　美濃加茂市の誕生を祝う

現市庁舎完成（昭和36年）

1. 郡・村・町から市へ

昭和29（1954）年4月1日、加茂郡内の太田町、古井町、山之上村、蜂屋村、加茂野村、伊深村、三和村（鹿塩地区を除く）、下米田村、和知村牧野地区が合併して、「美濃加茂市」になりました。当時の美濃加茂市の 面積は7,581㎢でした 。

昭和28（1953）年
美濃加茂市になる前の地図

美濃加茂市年表

明治
- 明治4（1871）年　廃藩置県により岐阜県ができる
- 明治12（1879）年　加茂郡役所が太田町にできる
- 明治22（1889）年　市町村制により太田町、古井村、山之上村、蜂屋村、伊深村、下米田村ができる
- 明治30（1897）年　加茂野村、三和村ができる

大正
- 大正13(1924)年　古井村が古井町になる

昭和

20

昭和29年 美濃加茂市誕生

- 昭和29（1954）年　美濃加茂市が誕生する（加茂郡内の太田町、古井町、山之上村、蜂屋村、加茂野村、伊深村、下米田村、三和村（鹿塩地区を除く）、和知村（大字牧野のみ））
- 昭和36（1961）年　市役所の新庁舎が完成する

40

- 昭和49（1974）年　市制20周年の式典が行われる
- 市の木が「椋（むく）」、市の花が「あじさい」になる
- 昭和54（1979）年　市役所の西館が完成する

60

平成
- 平成2（1990）年　市役所の分庁舎が完成する
- 平成16（2004）年　市制50周年をむかえる

令和

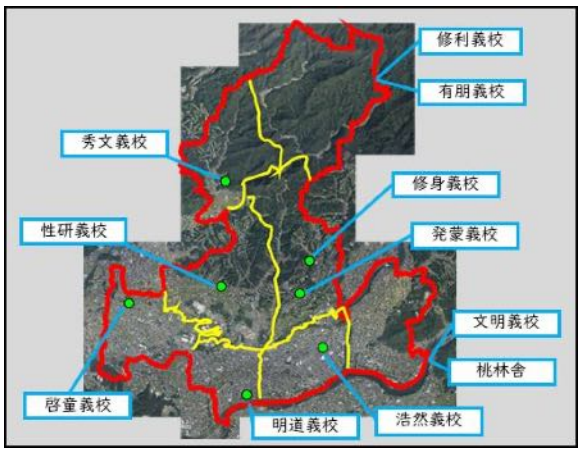
2. 学校や公共施設ができた

学校のはじまりと近代化

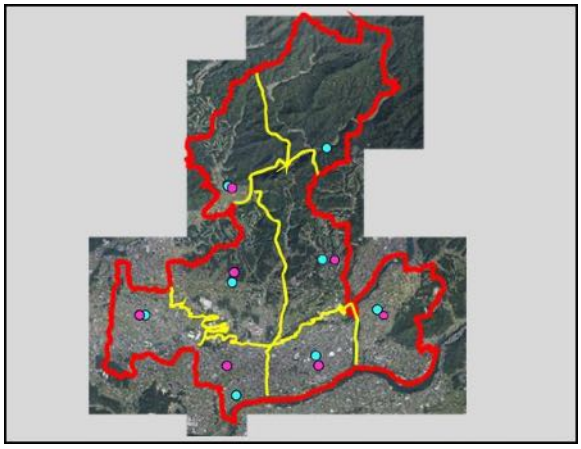
明治5（1872）年、政府により学制発布が行われ、美濃加茂市域には小学校（義校）が設立されました。当時の義校は、設立から維持経営費にいたるまで地域の有力者からの寄付金に頼っており、そのほとんどが寺の境内に設立されました。

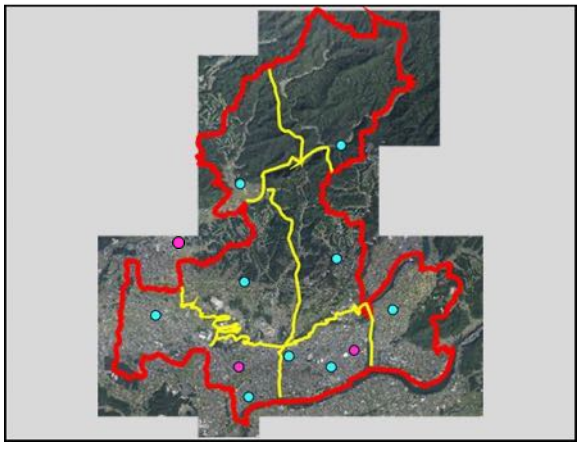
その後、昭和22（1947）年に6･3制を義務教育とする新しい学校教育法が施行されると、合併前の町村ごとに小中学校が設立されるようになりました。

昭和29（1954）年の市制開始時、市域には8つの小学校（太田、古井、山之上、蜂屋、加茂野、伊深、三和、下米田）と、7つの中学校（太田、古井、山之上、蜂屋、加茂野、伊深、下米田）がありました。その後、中学校の統合や、児童数の増加に伴う小学校の新設（山手）を経て、現在の9小学校、3中学校（そのうち、双葉中は美濃加茂市と富加町の組合立）になりました。



明治6（1873）年頃の主な小学校（義校）の場所


昭和29（1954）年の小学校（○）、中学校（●）の場所


令和3（2021）年の小学校（○）、中学校（●）の場所

開校当時の明道義校（祐泉寺）の教場
写真右下の小さな部分が教場で、広さは6坪程度でした
＊写っている人たちは後世の人々です

山之上小学校校舎（昭和30年）
市内初の鉄筋コンクリート造の校舎です

三和小学校校舎　（昭和63年）
昭和30年に建築され、昭和63年に新校舎が完成するまで市内最後の木造校舎として使用されていました

コラム：近代化する校舎

昭和29（1954）年の市制開始時、市内の小学校の校舎は全て木造でした。明治や大正の時代に建てられた校舎も多く、老朽化が進んでいることや、児童数の増加による校舎の増築、特別教室など施設の充実が必要なことから、校舎の新築が進められました。

昭和30（1955）年に山之上小学校が市内初の鉄筋コンクリート造りの校舎として新築されたのをはじめに、昭和37（1962）年に古井小、昭和39（1964）年に下米田小と順次鉄筋コンクリート化が進められ、昭和63（1988）年の三和小の新校舎の完成により市内の木造校舎は姿を消しました。

公共施設の充実

美濃加茂市の誕生後、公民館や公園、図書館や体育施設など、市民の健康で文化的な活動の場としての公共施設も次々と整備されました。

市内初の独立した市立図書館（昭和54年）

図書館

市立図書館は、昭和33（1958）年に市役所分室に設置されましたが、専用館ではないことや、蔵書数も少なかったことなどから利用者も少なく、活動は停滞気味でした。

しかし、地域文化の拠点として、また、市民生活向上の為の情報センターとして独立した図書館を要望する声が高まったことから、昭和54（1979）年に木曽川畔に新しい市立図書館が設立されました。同時に、図書館に来られない人のための移動図書館「そよかぜ号」も運行を開始しました。市内の連絡所や公民館の他、小学校も巡回し、多くの子どもたちが利用しました。平成2（1990）年に誕生した「新そよかぜ号」は、積載冊数2,500冊で、車の外からも本が選べる外架式書棚を搭載し、雨天時にはサイドボディがルーフになるなど便利になり、平成12（2000）年まで運行しました。

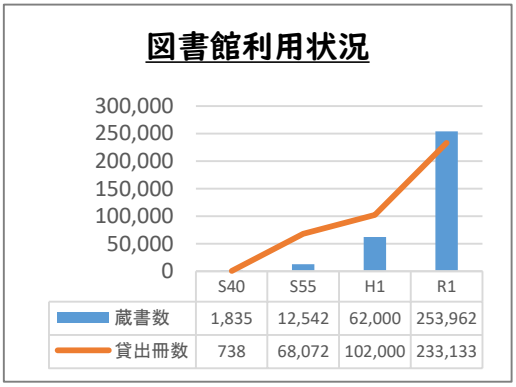
昭和58（1983）年の水害で図書館が浸水したことや、それに伴う木曽川護岸築堤工事により、昭和62（1987）年に現在地（中央体育館東隣り）に新築移転しました。

平成8（1996）年に本郷町（古井）に東図書館がオープンし、平成21（2009）年には三和交流センター内に北部分室も開室したことにより、令和4（2022）年現在は、市内に3つの図書館が設置されています。

新築移転された市立図書館（昭和62年）

「そよかぜ号」を利用する児童（昭和58年）

「新そよかぜ号」（平成2年）



コラム：高まる市民の読書熱

市立図書館が設立されるきっかけとなったのは、当時「私と市長のはがき」に寄せられた『図書館がほしい』という多くの設置要望でした。美濃加茂市では、市立図書館設立以前より、各地域において読書サークルの活動がさかんに行われており、昭和54（1979）年時点では市に登録されている11の読書サークルの他、未登録の読書サークルも数多くあり、積極的な活動が広がっていました。

文化会館

文化会館は、昭和55（1980）年にオープンしました。大ホール、練習室、展示室などの設備を備え、舞台の音響設備は県下一を誇るものであった文化会館は、それまで活動の拠点がなかった文化活動に大きな希望を与えるものとなりました。

市民の文化活動の拠点であり続けてきた文化会館は、令和元（2019）年から約2年をかけて、大規模改修が行われました。耐震性や音響環境の向上に加え、「おもいやりトイレ」や客席中央への車椅子席の設置など、より多くの人々にとって安心・安全に利用できる施設として、令和3（2021）年に「かも～る」の愛称とともにリニューアルオープンしました。

文化会館外観（令和3年）

大ホール（令和３年）

大ホール中央の車いす席（令和３年）

生涯学習センター

昭和58（1983）年には、市庁舎の隣に美濃加茂市中央公民館がオープンし、市民の生涯学習の拠点となっています。建物の一階部分には保健センターを併設し、健康相談や健康教育などの場ともなりました。（保健センターは令和4（2022）年に中部国際医療センター内の「みのかも健康プラザ」に移転しました。）

現在、生涯学習センターでは、地域の交流センターと共に美濃加茂市によるさまざまな講座が開催され、また、市民によるサークル活動も活発に行われています。

生涯学習センター（市役所の東隣）

完成間近の中濃体育館（昭和47年）

中央体育館プラザちゅうたい

昭和47（1972）年には、中濃体育館（現・中央体育館プラザちゅうたい）がオープンしました。 この体育館は、美濃加茂市を中心に、広く中濃地区全体のスポーツ活動や集会の場として設立されたため、中濃体育館と名付けられました。

これまでにない、一般市民が自由に利用できる屋内体育館であったことや、バレーボールやバスケットボール、レスリングや柔道、弓道など、多くの競技が行える施設であったこと、美容体操器具やトレーニング用具も設置されていたことなどから、さまざまな大会が開かれると同時に、地域住民の体力向上の拠点施設となりました。

中濃体育館竣工記念バレーボール大会（昭和47年）

みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム

平成12（2000）年には、 郷土の貴重な歴史・民俗資料を収集し、新たな文化を創造する「郷土資料館」と、市民が文化・芸術に親しむ「文化の森」としての面を併せ持つ施設として、『みのかも文化の森/美濃加茂市民ミュージアム』が開館しました。

また、平成14年度からの導入が決まっていた「総合的な学習の時間」や、「生きる力」「自ら学び、自ら考える」教育といった時代の変化にあわせた教育改革を受け、地域の物的・人的資源を活用した教育を進めていた学校現場との連携を考え、教育センターも併設された『みのかも文化の森』は、全国にも類を見ない文化と教育の複合施設となっています。

みのかも文化の森（平成12年開館）

まゆの家まつり（平成30年）

ふらっとみゅーじあむ（平成30年）
夏休みの子ども向け講座

文化の森20周年記念式典（令和2年）

学校活用（令和2年）
小学4年生 社会科「きょう土を開く」
もっこ体験

企画展「だいすき！虫」展内覧会（令和3年）

美濃加茂市の学校、公共施設年表

学校の年表

明治5(1872)年　政府による学制発布
明治6(1873)年　市域と付近に小学義校が設立される

明治12(1879)年　学制が廃止され、教育令が公布される
→義校が公立学校になる
明治19(1886)年　学校令が公布される
→小学校を尋常・高等に分ける
→尋常小学校を義務教育とする

明治33(1900)年　改正小学校令が出される
→授業料が無料になる
→就学率が上昇する

昭和22(1947)年　学校教育法が施行され、町村立の小中学校ができる
昭和27(1952)年　伊深中と三和中が統合し、後の北中学校となる

昭和30(1955)年　山之上小校舎新築完成
市内初の鉄筋コンクリート
昭和35(1960)年　古井、下米田、山之上中が合併し、東中学校となる

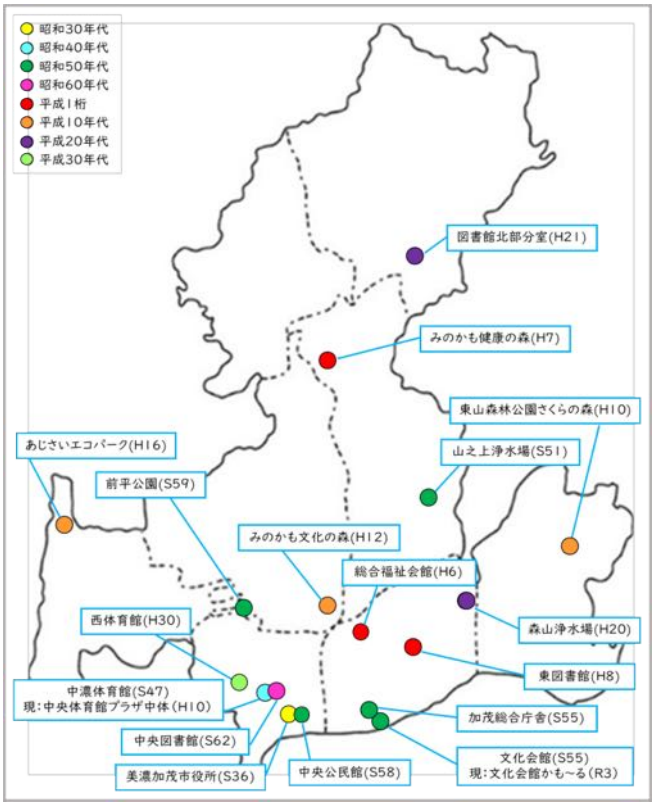
昭和41(1966)年　太田、加茂野中が合併し、西中学校となる
昭和42(1967)年　西中学校に蜂屋中が統合
昭和44(1969)年　北中と富加中を統合した新中学校(双葉中)が発足

昭和50(1975)年　新設の山手小が開校し、9小学校体制になる

昭和63 (1988)年　三和小の校舎が新築され、市内の木造校舎は姿を消す

明治
大正
昭和
20
昭和29年 美濃加茂市誕生
40
60
平成
15
30
令和

公共施設の場所と建てられた年



公共施設の年表

昭和33(1958)年　市立図書館設置(市役所分室)
昭和36(1961)年　市役所新庁舎完成

昭和47(1972)年　中濃体育館完成

昭和51(1976)年　山之上浄水場完成
昭和54(1979)年　新市立図書館設立(木曽川畔)
昭和55(1980)年　文化会館、加茂総合庁舎開館
昭和58(1983)年　中央公民館完成
昭和59(1984)年　前平公園の全面整備完了

昭和62(1987)年　市立図書館新築移転
(現在地:中央体育館東隣)

平成6(1994)年　総合福祉会館が開館
平成7(1995)年　みのかも健康の森オープン
平成8(1996)年　東図書館開館

平成10(1998)年　中濃体育館が「中央体育館プラザ中体」になる
「東山森林公園さくらの森」オープン
平成12(2000)年　みのかも文化の森開館
平成16(2004)年　あじさいエコパーク完成

平成20(2008)年　森山浄水場完成
平成21(2009)年　図書館北部分室開館

平成30(2018)年　西体育館完成

注目ポイント☞

美濃加茂市の公共施設は、どんな場所に、どんな役割の施設が建てられていますか？調べてみましょう。
例）市内３つ目の図書館は、なぜ三和地区に作られたのでしょう？

注目ポイント☞

美濃加茂市に新しく公共施設を作るなら、どこに、どんな施設を作ると良いですか？
現在の公共施設の位置や市内の土地利用の様子から、新しい施設の目的に合う場所を考えてみましょう。

3. みのかも小学生

昭和の子どもたち

昭和初期の子どもたちは、家族の一員として、たくさんのお手伝いをしました。井戸での水くみ、風呂焚き、田畑仕事やお使い、薪割り、柴刈り、洗濯物の脱水、子守りなどです。それらのお手伝いの合間に、おもちゃを手作りしたり、身近にあるもので工夫をして遊びを考えたりしていました。

各家庭に水道や電気、ガスがひかれるようになり、家事の負担が少なくなってきたことで、子どもたちが担う役割も少なくなりました。放課後の時間を自由に過ごしたり、習い事に通ったりすることができるようになったのも、生活が便利になってきたことによるものです。

給食の様子（市内・昭和30年代）

ダルマストーブと児童（太田小・昭和30年代）
撮影：水谷智郎氏

消毒液に手を浸す児童（伊深小・昭和30年代）
アルマイト製の洗面器を使っている

考えて、作って、工夫して遊ぶ

昭和50年代にテレビゲームが登場するより以前には、子どもたちは近所の空き地や道路に集まり、手作りのおもちゃや自分たちで考えた遊びを楽しみました。

缶けりや紙鉄砲、杉玉鉄砲や竹馬、たたきコマなど、身近な材料を使って考えた遊びは、道具を作るにも、上手に遊ぶにもコツが必要で、上達するよう繰り返しチャレンジしたそうです。

石けりやケンパ、クギさしなど、地面が土だったからこそ楽しめた遊びは、道路が舗装されたり、空き地が整備されたりする中で遊ぶことが難しくなっていきました。

木曽川や飛騨川などの川で泳いだり、魚を釣ったり、石投げをしたりと、川も身近なあそび場だったようです。

『美濃生活絵巻』より
古井村（現・美濃加茂市本郷町）に生まれた高橋余一(明治31年～昭和59年)が明治から昭和にかけての地域の風習や子どもの遊びなどを描きました

手作りの飛行機であそぶ児童
（昭和30年代）撮影：渡辺誠治氏

あそびの思い出

学校から帰ると、近所の男の子たちと山の中に陣地を作り、ターザン遊びをしました。石や釘を使って地面に陣取りゲームもよくやりました。

私達の年代はどこへ行っても多くの子どもがいました。何人集まっても誰もが出来る遊びを誰かが思いつき、みんなで遊んでいました。

※昭和のくらし体験集3『子どもの頃の遊びの思い出』より、一部抜粋

昭和のくらし体験集３
『子どもの頃の遊びの思い出』

コラム：町内の一大イベント「町民運動会」

昭和の時代、運動会といえば、今のような学校行事としての運動会ではなく、町をあげての行事である「町民運動会」でした。

児童は運動会用の履物である「運動足袋」を履き、白い体操服にちょうちんブルマといった、ふだんの体育の時間とは違う、特別な恰好で運動会に臨みました。

また、未就学児から大人までが参加する様々な種目があり、会場となる学校には、ねりあめやわたあめの出店がくるなど、お祭りのような賑わいでした。

一方で、町民のほとんどが運動会に参加しているため、空き巣の被害が心配されました。そこで、消防団員による町内の見回りも行われていたようです。

給食について

美濃加茂市域の給食のはじまりは、冬の時期に、母親たちが交代で学校に材料を持ち寄り、みそ汁を作ってふるまってくれる「みそ汁給食」でした。主食となるご飯や麦飯は、各自で持参していました。

しかし、戦争によって「みそ汁給食」は中断し、戦後の食糧不足の中、昭和22（1947）年から、かんづめの支給や、脱脂粉乳による「ミルク給食」が一部の学校で行われるようになり、やがて各学校で実施されるようになりました。

昭和29（1954）年に『学校給食法』が制定されると、パン・脱脂ミルク・副食物による「完全給食」がはじまりました。この頃は、各学校の調理施設で給食が作られていましたが、調理施設の老朽化や設備の消耗の問題などから、昭和46（1971）年に清水町に給食センターが設立され、市内全ての学校へ給食が届けられるようになりました。

その後、平成9（1997）年に示された『学校給食衛生管理の基準』に対応するため、平成20（2008）年、蜂屋台に現在の給食センター（あじさいLunchの森）が完成しました。

昭和40年代の給食（美濃加茂伝承料理の会による再現）
昭和40年代後半、給食の主食はパンで、脱脂粉乳はビンの牛乳に変わり、「鯨の竜田揚げ」がこの頃の定番メニューでした

令和3年の給食
主食（米、パン、麺類）と汁物・主菜・副菜・牛乳に、デザートがつくこともあります

アルミのお弁当箱
家からご飯を入れて学校に持って行き、ストーブであたためました

脱脂粉乳缶
脱脂粉乳が入れられていたヤカンですバケツのような食缶に入った脱脂粉乳をひしゃくで配った学校もありました

美濃加茂市の給食年表

昭和

昭和10年代頃（戦前）　各学校で、「みそ汁給食」が行われる

給食の思い出
・家から麦飯だけ持参し、学校で母たちが当番でみそ汁を作ってくれた。具が野菜だとがっかりで、豆腐・油あげだと大喜びしたものだ。

20

昭和16（1941）年以降　戦争により、「みそ汁給食」が中断される

給食の思い出
・私たちの時代は給食はなかった。戦中から戦後の時代です。弁当のかわりにさつま芋などです。

昭和22（1947）年　「ミルク給食」がはじまる

昭和29年 美濃加茂市 誕生

昭和29（1954）年　「完全給食」がはじまる

給食の思い出
・脱脂粉乳の味が悪く、飲むのに大変苦労した思い出があります。鯨肉のメニューが今は懐かしい味がします。もう一度食べてみたい気がします。

40

昭和42（1967）年　生牛乳の提供がはじまる

給食の思い出
・各ストーブに、おけに水を入れ、温めた中に牛乳を入れたりした。鯨の肉、味もよく美味しかった。

昭和46（1971）年　給食センターが完成する

給食の思い出
・ミルメークはみんな大好物で、欠席の子の分はとっておいた。なんといっても鯨のタツタ揚げは懐かしい。冬にだるまストーブの上に大きな洗面器?!に湯がはってあり、その中に瓶の牛乳をいれ、あたためて飲んだ。ビンのフタに事前に名前を書くのがお約束！

昭和53（1978）年
給食に米飯が導入される

60

昭和60（1985）年
給食で箸を使うようになる

平成

平成20（2008）年
給食センター「あじさいLunchの森」が完成する

令和

四季を食べる講座「昭和の給食」

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）

美濃加茂市の北部は土地が高く、南部は土地が低くなっています。木曽川が流れており、その近くは低い土地が広がっています。山の多い土地や、農業に向いている開けた土地、川に近く水源が豊富な土地などその土地に合わせて、多様な暮らしがあります。昭和40年頃から工場が増加すると、地域によっては人口も増加します。また、フィリピンやブラジルなど、海外から美濃加茂市へ移り住むようになった人も多数います。

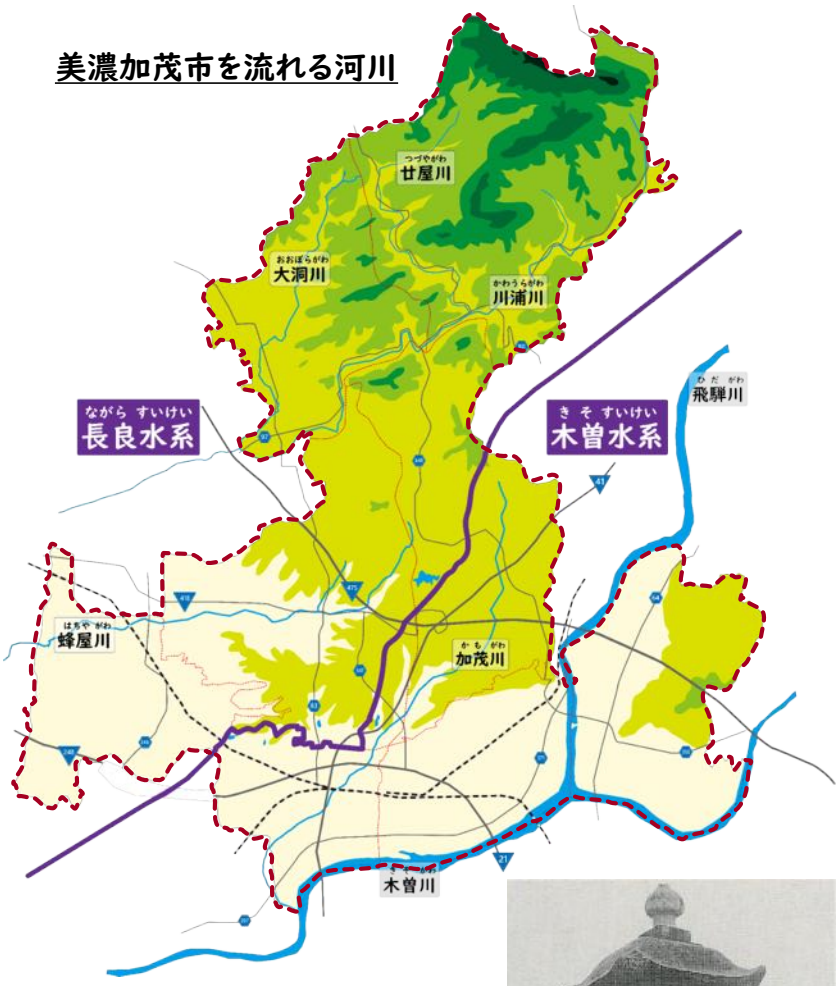
1. 川の近くのくらし

美濃加茂市は、豊かな自然に囲まれています。

北側は山が多く、川浦川や蜂屋川を始めとした、長良川水系の川が巡ります。南側には飛騨川や、日本でも有名な大河川である木曽川が流れます。

このような自然環境は、田や畑となる土地を潤し作物を育み、豊かな実りをもたらす一方、時に私たちに災害という形で、危害を加えることもあります。これまで美濃加茂市は、毎年のように様々な災害に見舞われてきました。

美濃加茂市を流れる河川



注目ポイント☞

あなたの住んでいる地域には、どのような川が流れていますか？調べてみましょう。

川とともに生きる人々

美濃加茂市の南側は木曽川の中流域にあたり、飛騨川との合流点でもあるため、川がひとたび氾濫すると、すべてを押し流してしまうような風水害に広がりました。特に天保7（1836）年の暴風雨による災害は大きなもので、凶作による大勢の餓死者が出ました。

川のそばにある地域には、集落ごとに水神が祀られることが多く、川にたずさわる人たちにとって、日常生活のなかでの心のよりどころとなっていました。水神は身近に流れる、川という大自然を畏れ敬うことと、水難を防ぐことを人々が祈り願う象徴でした。

水神（川合町八幡神社）
常夜燈を兼ねた水神、嘉永7（1854）年に建てられました

浸水した太田地区（昭和39年9月25日　太田小学校から北を向いて撮影）

水神（深田町深田神社）

豊富な自然資源をもたらした川

江戸時代の古記録によると、飛騨、木曽川に沿った村では、鮎（アユ）、鱒（マス）、鯉（コイ）、スナクジ・ハゼがたくさん生息していたことがわかっています。人々は川の状況や魚の種類によってそれぞれ漁の道具や方法を工夫してきました。川からもたらされる資源の一つに川石があります。木曽川の中流域であるこの地域は、直径40㎝程度の形の整った丸石を採るのにうってつけの場所でした。

マンガ
川石を採るための専用の道具
『川とともに生きる』より

鮎の友釣り　高橋余一画
おとりの鮎を使って、鮎を引っかける『美濃生活絵巻』より

コラム：川の思い出「魚とり」

子供の頃から、魚をとりに行く父について木曽川へ行きました。1回の漁で100匹くらいとれる時もあれば、3～4匹の時もありました。昭和20年以前のことだったと思いますが・・・深田の清水のところから中濃大橋まで、2時間ほど漁をして、重さにして一貫目（3.5kg）もとれたことがあります。

ふだん、とれた魚は家に持ち帰り、翌日、母に料理してもらうのですが、冷蔵庫のある家庭が少なかった時代、大量のあゆの処分に困って、近所にある魚屋（魚徳）に持ち込んで、店で売ってもらいました。私が漁をしていたのは、昭和10年頃から50年頃までです。

【木曽川：美濃加茂市太田本町ほか／80代男性】

美濃加茂市民ミュージアム紀要「川の思い出」調査の概要と「同2010」事業の報告，藤村俊

いかだ流し

車や鉄道の無い時代には、重くてかさばる木材を運ぶ手段として川が利用されました。木曽や飛騨の山々で伐採された木材は最初一本ずつ流され、途中の綱場（つなば）でいかだに組まれた後、名古屋、桑名などそれぞれの目的地へ川を利用し送られました。いかだ流しは、主に秋から春の彼岸まで、川の水量が少なく安定した時期に行われました。最盛期には、下麻生綱場だけでも1日200を数えたいかだ流しは、昭和初期のダム建設によりその歴史を閉じました。

青柳橋といかだ（昭和9年頃）『写真集美濃加茂』より

いかだを組む様子と、組んだいかだに乗る様子『川とともに生きる』より

今渡ダム建設

木曽川飛騨川の合流点下流にある今渡ダムは昭和14（1939）年に完成しました。今渡ダムは、大量の水を貯えることで治水・利水・発電に役割を果たすこととなりました。

今渡発電所建設にあたっては、木曽の人々との間で様々な対立を生むことにもなりました。その対立点の一番は、木曽の木材です。発電所建設によって伝統的な木材流送ができなくなるため、深刻な問題となりました。

そのほか、生息する魚や、寝覚めの床（とこ）など木曽の自然景観の保全についても議論となりました。

今渡ダム建設　（昭和13年6月2日）

今渡ダムの水彩画　（平成30年・渡辺崇画）

2. 農家のくらし

美濃加茂市の農業は稲作と畑作が中心ですが、カイコ（蚕）を飼い生糸（絹）を生みだす養蚕は、この地域の特ちょうです。大正時代からさかんに行われていました。しかし、昭和30年代になると化学繊維が増えたことで養蚕農家は少なくなりました。

明治時代の終わりごろから道路整備が進み、鉄道が開通すると農耕や運搬用の馬を飼う家が少なくなりました。昭和の初めごろになると牛耕を行うために牛を飼う家が増えました。山之上では柿、梨、ブドウなどの出荷が増え、鉄道を使い東京へも出荷されました。昭和30（1955）年に中濃地区集約酪農地域になり、酪農農家が増え、家畜市場（昭和31（1956）年）や岐阜県家畜センター（昭和32（1957）年）などがつくられました。その後、安定して果樹の生産を行うためと出荷をしやすくするために果実集荷場（昭和61（1986）年）が山之上にできました。

「しろかき」のようす（伊深町：昭和38年頃　佐野一彦撮影）
牛に「マンガ」をひかせている
佐野一彦（明治36年~平成9年） 哲学者で、昭和20年に伊深村（現・美濃加茂市伊深）へ疎開し、その後定住します
民俗学の視点で伊深の人々の暮らしを撮影し、約七千枚の写真に残しました

特色のある農業

美濃加茂市の特色のある農業としては、昭和50年代に復活した干し柿の蜂屋柿、大正時代に始まった山之上の果樹園、昭和初期からの三和のしいたけ栽培などがあります。

蜂屋柿づくり（蜂屋町：昭和33年）

しいたけ栽培（三和町：昭和30年代）

柿選果場（山之上町：昭和54年頃）

農業年表

明治
- 明治37(1904)年　セントルイス万国博覧会で蜂屋柿の干柿が金牌、苗木が銀牌を受ける
- 明治42(1909)年　大畑市太郎が上古井の耕地整理に取りくむ
- 明治43(1910)年　上古井の耕地整理が完了する

大正
- 大正10年頃　佐口佐太郎が柿の植樹に成功する
- 大正11年（1922）　この頃から山之上の果樹栽培が始まる
- 大正13年（1924）　山之上の上野台地の開発が始まる

昭和

20
- 昭初初期　牛耕が普及し始め、肉牛を飼う家が増える
  乳牛の飼育も加茂野を中心に行われる
  山之上で柿、梨、ブドウなどが鉄道を使い東京へも出荷される
  天池武義と木沢一二が発生率100%のシイタケ栽培に成功する

昭和29年 美濃加茂市誕生

40
- 戦後　三和でシイタケ栽培がさかんに行われる
- 昭和30（1955）年　「中濃地区集約酪農地域」に指定され酪農農家が増える
- 昭和31（1956）年　加茂畜産農協の家畜市場が完成する
- 昭和32（1957）年　岐阜県家畜センターが完成する
- 昭和33（1958）年　山之上農事センターができる

60
- 昭和42（1967）年　山之上柿選果場が完成する
- 昭和46（1971）年　加茂野町にライスセンターが完成する
- 昭和52（1977）年　下米田町にライスセンターが完成する
- 昭和55（1980）年　蜂屋柿品評会が40年ぶりに行われる
- 昭和61（1986）年　山之上果樹園に果実集荷場が完成する

平成

令和

コラム：昭和30年代までの農作業

昭和30年代までは、田植えや稲刈りなどの農作業は家族や親せき、地域の人々が集まって行っていました。今ではトラクターなどの農業機械を使い少人数、短時間で農作業を行うことが出来るようになり、多くの人が集まり農作業を行う機会が少なくなりました。

家族や親せき、みんなで田植え（本郷町：昭和32年）
撮影：渡辺誠治氏

3.工場のうつりかわり

美濃加茂市が合併して市になった昭和29年、市内最大の工場は製糸業の郡是製糸美濃工場でした。明治期から昭和30年代へかけて、美濃加茂市域では蚕糸業が活発でした。

蚕糸業の盛衰

蚕糸業（さんしぎょう）とは、生糸の生産や流通に関係のある産業で、繭の生産に関わる養蚕業と、繭から生糸を製造するのにかかわる製糸業とを合わせていいます。

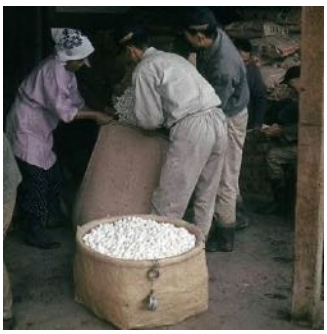
養蚕業とは、カイコ（蚕）を飼ってその繭から生糸（絹）を作る産業です。美濃加茂市域は、明治期から養蚕業が盛んな地域でした。また、市を流れる木曽川沿いは砂地部分が多く、蚕の餌となる桑（くわ）がよく育つ土壌条件がありました。農家は蚕の繭を売り、現金収入を得ることができました。大正期には、市域の全戸数の六割が桑畑を作っており、野菜などの畑は半数もありませんでした。

また、製糸業では、明治期以降機械製糸が発展し、明治22（1889）年、古井村に市域で最初の製糸工場（渡辺製糸場）が創業します。その後大正7（1918）年には、日本の二大製糸会社であった郡是製糸と合併し、「郡是製糸美濃工場」となると、周辺の養蚕農家から繭が大量に運びこまれ、この市域の蚕糸業はさらに活気づきます。しかし、化学繊維の登場によって蚕糸の需要が減ると、郡是製糸美濃工場は昭和46（1971）年に操業を停止し、養蚕農家も少なくなっていきます。

桑畑が広がる森山町　（古井村：大正13年）

繭搬入作業（繭渡し）（古井村：昭和6～7年頃）

蚕の世話
（伊深町：昭和39年8月　佐野一彦撮影）



繭渡し 組合（農協）
（伊深町：昭和39年10月　佐野一彦撮影）

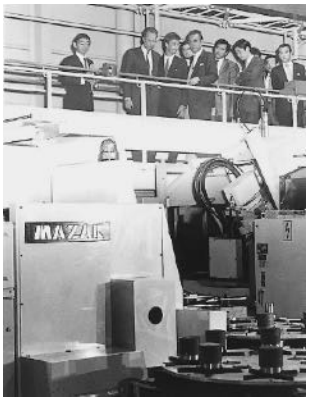
郡是製糸美濃工場　（昭和41年）航空写真

工場の誘致と工業団地

昭和40年代になると産業の変化により、電気・機械・金属に関わる工場が増えるようになってきました。昭和44 年に日立製作所岐阜工場を誘致したことが大きな転機となり、日立製作所、ソニー、富士通など 12 社、従業員計 1,700 人を超える雇用を確保しました。

近年には蜂屋町を中心として大規模な土地区画整理事業が進められ、工業団地が造成されました。これにより、様々な企業の工場が進出し、製菓など食品に関わる工場も増えています。

日立製作所岐阜工場（現・マクセルフロンティア岐阜事業所)(昭和44年進出)



山崎鉄工所（現・ヤマザキマザック美濃加茂）（昭和55年進出）

美濃加茂市の工場年表

- **明治**
  - 明治22(1889)年 古井村に「渡辺製糸場」ができる。
  - 明治45(1912)年 「渡辺製糸場」が株式会社組織に改められ、「蚕栄製糸」に改称。
- **大正**
  - 大正6(1917)年 市域の全戸数の六割が桑畑を作る
  - 大正7(1918)年 「蚕栄製糸」は郡是製糸と合併し、「郡是製糸美濃工場」となる。
- **昭和**
  - 20
  - 昭和29年 美濃加茂市誕生
  - 昭和37(1962)年 誘致工場6社の合同調印が行われる
  - 30
  - 40
  - 昭和47(1972)年 郡是製糸美濃工場が操業停止。
- **平成**
  - 平成20(2008)年 蜂屋台工業団地の企業立地が完了する
- **令和**

4. 人がたくさん住むところ

団地や住宅地の開発

昭和40年代頃から、人口増加や核家族化による世帯分離などに伴って深刻化してきた住宅問題の解消や、地域社会の開発を目的として、団地や住宅地の造成が進められました。

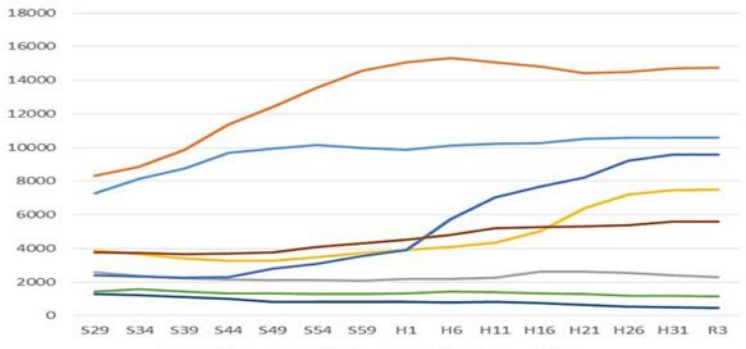
昭和41（1966）年に新池団地（古井）、昭和48（1973）年に森山団地（古井）が分譲を開始しました。また、平成9（1997）年には中部台地土地区画整理事業がはじまり、「ふれ愛タウン美濃加茂中部台」（蜂屋）として、多くの人が住む住宅地となっています。こうした団地の多くは山を切り開いた高台に作られ、道沿いに家がきれいに並んで建てられています。

その一方で、山が多く、土砂災害の危険がある北部の地域には新しい住宅の建設ができないことから、近年では地区による人口の偏りが大きくなっています。

注目ポイント☞

人口のうつりかわりのグラフと、年表をくらべてみましょう。

地区別人口のうつりかわり



	S29	S34	S39	S44	S49	S54	S59	H1	H6	H11	H16	H21	H26	H31	R3
太田	7264	8136	8752	9687	9943	10139	9956	9877	10100	10214	10261	10521	10597	10582	10567
古井	8306	8846	9846	11374	12410	13568	14551	15048	15309	15080	14802	14431	14485	14693	14745
山之上	2573	2371	2230	2165	2130	2109	2084	2177	2181	2274	2604	2631	2554	2398	2295
蜂屋	3866	3661	3397	3256	3274	3488	3729	3894	4074	4341	5015	6398	7217	7445	7507
加茂野	2402	2341	2266	2308	2784	3100	3550	3900	5740	7041	7686	8227	9201	9563	9589
伊深	1425	1578	1445	1334	1316	1294	1291	1321	1440	1395	1327	1273	1197	1164	1136
三和	1279	1229	1106	988	829	810	807	813	793	814	764	651	547	495	464
下米田	3764	3741	3653	3681	3773	4104	4318	4530	4792	5181	5269	5290	5381	5591	5586

森山団地（昭和48年）

造成中の中部台（蜂屋町：平成14年）

コラム：外国人の多いまち

平成2（1990）年に改正入管法が施行されると、美濃加茂市には大きな工場があり、働く場所があったことから、外国人人口が増え始めました。

その後、大企業の撤退により一時的に外国人人口が減少した時期もありましたが、市の多文化共生推進事業により、外国人の人々にとって住みやすい環境が整えられてきていることや、外国人のコミュニティーが形成されていることなどから、定住化が進んでいます。

そのため、現在では、市の総人口に占める外国人の割合（外国人比率）が岐阜県の中で一番高くなっており、全国の中でも上位に入ります。

岐阜県市町村別外国人人口比率 上位3市町村

市町村名	総人口（人）	外国人人口（人）	外国人比率（%）
美濃加茂市	56,587	5,439	9.6
可児市	99,400	8,164	8.2
坂祝町	8,032	552	6.9

岐阜県HP 令和3年6月現在人口より

団地や住宅地の年表

昭和

20

昭和27（1952）年　市内初の公営住宅が太田町トドメキに6戸（木造平屋）建てられる
昭和29（1954）年～昭和 30（1955）年　市営住宅が太田、古井、蜂屋に建てられる

昭和29年 美濃加茂市誕生

40

昭和41（1966）年　新池団地（古井）が分譲開始
昭和48（1973）年　森山団地（古井）が分譲開始

60

昭和53（1978）年　市営住宅が古井に建てられる
昭和55（1980）年　市営住宅が蜂屋に建てられる

平成

平成元（1989）年　市営住宅ハイツ矢田（蜂屋）第1棟が完成し、入居が始まる
平成元（1989）年　カモノハイツ（加茂野）が分譲開始
平成元（1989）年　伊深住宅団地（伊深）が分譲開始

平成9（1997）年　ふれ愛タウン美濃加茂中部台（蜂屋）が分譲開始
平成9（1997）年　三和市営住宅への入居が始まる

令和

D. 道具のうつりかわりと今

美濃加茂市域で電気が使えるようになったのは、大正2(1913)年に板取川電気会社の電とうが太田・古井地区に引かれたことが始まりです。昭和30(1955)年から昭和48(1973)年までの時期は、高度経済成長期と呼ばれ、家電製品が続々と発明されました。電気やガス、石油といったエネルギーを利用することにより、これまで手動で行っていた家事が家電製品などを使うことで手間が減り、人々の暮らしは大きく変わります。人々の暮らしと、道具はどのように移り変わるのでしょうか。

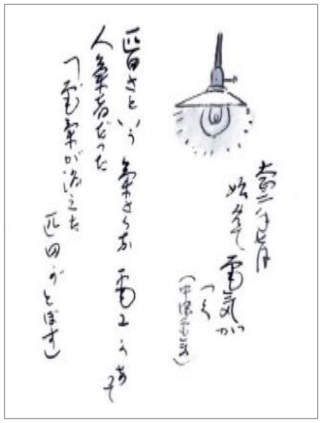
注目ポイント☞

くらしと道具のうつりかわりを調べてわかったことを元に、私たちの未来に今後どのような変化が起こるか、想像してみましょう。

1. あかりの道具のうつりかわり

電気が通る前までは、アンドンやランプ、灯明（とうみょう）の灯りのもとで、やぶれた衣服の縫いものや縄ないといった夜なべ仕事をしました。ランプは、石油や菜種油といったものを燃料としました。ランプの行商は、ガラスのホヤや芯など、付属品を売りに来ました。

大正の終わりには電灯が点るようになり、家の灯りはぐんと明るくなりました。電灯も始めは、今から思えば薄明るいカーボンの白熱電球でしたが、家の中で初めて点ったときには、目が覚めるように明るく感じたそうです。それも一つか二つの部屋につくばかりでしたが、だんだんと家中の至るところに電灯がつき、白熱灯も蛍光灯に替わり、現在では白色LEDを使うようになりました。持ち運ぶ灯りも、はじめはロウソクで、何かのときにはチョウチンをつけ、カンテラというものも使いましたが、今では懐中電灯となりました。



『美濃生活絵巻』より　高橋余一画
大正二年七月始めて電気がつく（中濃電気）
匹田さという気さくな電工があって
人気者だった「電気が消えた匹田がとぼす」

ボランティアさんの声

ロウソクや灯明はわずかな風で火が消えてしまいますが、行灯（あんどん）や提灯（ちょちん）は和紙でできた枠に包まれているので、風が吹いても火はきえません。

ランプはロウソクなどの明かりとくらべるととても明るくなりましたが、1時間も使うとホヤが煤（すす）で黒くなり、それを掃除するのがとても大変でした。

電灯が使えるようになった頃は近くの工場で電気を使うと電力が足りず、よく停電をしていました。

アンドン
木などの枠に紙を貼り、中に油皿をすえて火を灯す道具で、主に室内で使いました

チョウチン（提灯）
木などの枠に紙を貼り、中に油皿をすえて火を灯す道具で、主に屋外で使いました。

石油ランプ
石油や菜種油が燃料で、吊り下げて使うもの（写真）と床に置いて使うものがあり、主に室内で使いました

コラム：ランプの下に集う家族

現在は家の至る所に電灯があり、夜も昼間のように明るい中で過ごすことができますが、そうでなかった時代には小さな灯りを、家族みんなで共有していました。

右の絵では、ランプの灯りの下で蜂屋柿を家族みんなで剥いている様子が描かれています。現在はそれぞれの部屋に灯りがあるため、家族で共に住んでいても別の部屋で過ごす時間がありますが、この時代には一つの灯りの元に人が集まっていました。

電気がない頃の人々が家族と過ごす時間は、現代の私達よりもうんと長かったのかもしれませんね。

ランプの下に集う家族　高橋余一画

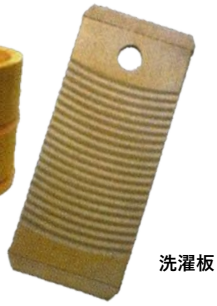
洗濯（伊深町：昭和37年3月11日 ）
コウド（洗い場）で洗たくをしている様子です

2. 洗濯の道具が変わった

かつては、洗濯板や手で揉む、足で踏むなどして洗濯をしました。洗濯せっけんのなかった頃は、灰のアクなどを使ってよごれを落としました。井戸のある家もありましたが、近くの川や池、清水の湧いている共同の洗い場へ行き洗濯をしました。川では、赤ちゃんの布のオシメは下流の方、肌着や手ぬぐいなどは上流の方というように、洗うものによって場所を地域の人たちで決めていました。また、洗濯板のギザギザのような形のある手ごろな石があれば、その上で洗濯をすることもありました。冬は、水の冷たさが身にしみる大変な作業でした。

「三種の神器」の一つである洗濯機が登場すると、自分の手を使い洗濯しなくてもよくなります。しかし洗濯が手軽になった分、人々は必要以上に衣服を洗濯するようになったかもしれませんね。

たらい



洗濯板

ボランティアさんの声

電化製品が家庭にも普及し始め、テレビ、冷蔵庫、洗濯機が「3種の神器」と言われた頃、多くの母親が一番欲しいと言っていたのが洗濯機でした。当時は家族の人数も多く1回の洗濯で朝から夕方まで行うこともありました。洗濯板での洗濯は足腰も痛くなり、かなりの重労働でした。

3. 食事が変わった

電気やガスが使えるようになると、調理に使う火も変わりました。イロリや、クド（かまど）では炭火をおこして調理をしましたが、ガスコンロが普及すると火おこしに必要な薪や炭などが必要なくなり、そのうち電気の熱を利用するIHコンロを使うようになると、いよいよ火は私達の生活から遠ざかりました。

ご飯も羽釜を火にくべて炊いていたので、焦がさないようにうまく炊くには、火加減を調節しなければなりませんでした。子どもの主なお手伝いとして、風呂の火の番がありましたが、そうして子どものうちから火の扱いを暮らしの中で学んでいました。現在は、電気式の炊飯器があるので、ボタン一つでご飯を炊けます。

イロリ（囲炉裏）
室内の一部分を四角に切り抜いた、火を焚く場所をイロリ（囲炉裏）といいます

クド（かまど）
上に鍋・釜などをかけ、その下で火を焚き、煮炊きするようにした設備です

ハガマ（羽釜）
クド（かまど）にはめ込むため、側面に羽が付いています

ガス釜
ガス式に変わると、クド（かまど）を使う必要がなくなりました

コラム：火を絶やさない役目は主婦の努め

火を中心に家族が集う場所は、一家団らんの重要な所であり、イロリの火を絶やさない役目は主婦の努めとされました。

クド（かまど）の場合には、まず朝ご飯を作るため、火が入れられます。その火は消さずに、小さな種火を残し、炭を炭火アイロンに使ったり、火鉢に入れたりして、一日中いろいろなことに使いました。クドの火は、夜、寝る前に落としました。

電気のない暮らしでは、火を絶やさないことが何よりも大切でした。

囲炉裏に集う家族　高橋余一画

4. みのかもの年中行事

年中行事とは、季節の巡りに合わせて、毎年定まったときに決まった形で繰り返して行われる行事のことをいいます。年中行事は暮らしを営む中で、欠かすことの出来ない行事でした。年中行事は、地域によって少しずつ名前や内容が変わります。現在も一部の行事が、美濃加茂市域に伝わっています。

注目ポイント☞

当時の人はどんな思いや願いをこめて、このような行事を行っていたのでしょうか?

七夕（伊深：昭和38年8月17日　佐野一彦撮影）
昭和30年から40年ごろは、旧暦で七夕をしていました。（現在の8月7日）七夕の前日に家ののきばたにささ竹を立て、色紙や短冊を吊るして飾り付けをし、ナスやスイカなど、そのときの畑のなりものを盛って、縁側にそなえました

月見の供え物（伊深：昭和40年9月10日　佐野一彦撮影）
旧暦の8月の十五夜と9月の十三夜は、一年で月が一番明るく美しいとされ、月見をしました　8月は「芋名月（いもめいげつ）」、9月は「豆名月」といいました　「芋名月」には、竹で編んだカゴジをふせて、その上に里いもを株のまま一つと皿に盛った小イモとだんご汁を供え、蝋燭を灯します　供え物を置く場所は、家の門先の真ん中でした

まゆの家の年中行事

「まゆの家」は、昭和30年代を体感できるよう、「みのかも文化の森」内に復原された養蚕民家です。まゆの家では、1年を通して美濃加茂市域で現在まで伝わっている年中行事を行っています。

土びな
土びな（雛）とは、土をこねて形をつくり、焼いて絵の具で色をつけた人形です。ひな人形、武者人形、歌舞伎役者、動物などさまざまなものがあります

「門松立て」（まゆの家）
新年を迎えるため、昭和30年から40年代ごろは、年の瀬が近づくとすす払いや門松の準備、餅つきなどをしました

美濃加茂の1年

月	行事
一月	七草、ドンド
二月	節分、初午
三月	春彼岸、ひな祭り
四月	氏神の祭り
五月	端午の節句 ショウブ湯
六月	田植え
七月	七夕
八月	お盆
九月	秋彼岸、お月見
十月	秋祭り
十一月	
十二月	煤払い、門松立て

＊美濃加茂市内で行われている代表的な年中行事の一例です。地域によって行う時期や内容が異なります。『美濃加茂市史(民俗編)』より

コラム：二百十日（にひゃくとおか）

まゆの家の軒先に、鎌(かま)を逆さに縛った竹竿が立ててあります。

これは年中行事の「二百十日(にひゃくとおか)」で、台風が多い時期に農作物などが被害に合わないことを願い行ったおまじない（魔除け）です。

＊立春の日から数えて二百十日目にあたる9月1日頃に、かつて行われていたものです。

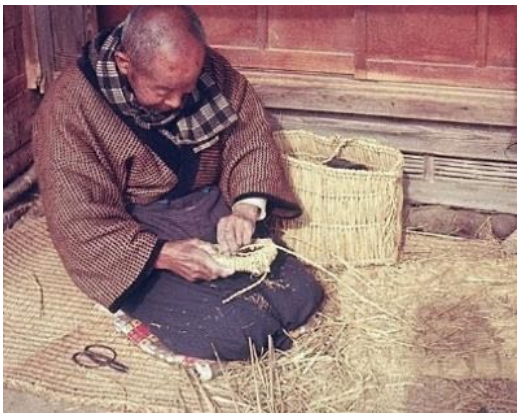
二百十日　逆さまにした鎌が竹竿にしばりつけてあります

5. 昔のくらしの知恵

わらで作る

昭和40年代頃まで、わらぞうりやミノといった身につける物から、オヒツ入れやビク（棒で吊って運ぶもの）などの道具まで、生活の中にはわらで作られたものがたくさんありました。

わら仕事は、夜なべや冬の農閑期（農作業をすることが少なく、一年のうちで暇な時期）に行い、子どもも手伝いました。子どもは父親のそばで一緒に「わら打ち」や「縄ない」をし、やり方を覚えました。高学年になると、わらぞうりが一通り作れるようになりました。



わら仕事（昭和43年1月　佐野一彦撮影）
ビクと鍋敷きを作っている様子です

わらぞうり
ワラであんだ履物です

鍋敷き
ワラで編んだなべしきです

注目ポイント☞

「わら」で作られた道具が多いのは、どうしてでしょう？

←オヒツ入れ
ご飯が冷めないようにお櫃（ひつ）ごといれる保温具で、言うなれば昔の電子ジャーです　ワラを厚く編み、丸い入れ物状にして、上から蓋をかぶせるようになっています

保存食

秋の終わりごろ、夏に種を蒔いた冬の野菜が収穫を迎えます。
収穫した野菜は、漬物にしたり、干したりして保存食にしました。大根はサキボシ大根や切り干し大根にしました。干し大根は漬物桶に漬けて、たくあんを一年分つくり、ほぼ毎食、食卓に出しました。

大根を干す（昭和37年12月4日　佐野一彦撮影）

大根を干す（高橋余一画）

白菜を干す（昭和42年11月24日　佐野一彦撮影）

コラム：こどもの仕事

水汲みは子どもの仕事でした。お金持ちの家は、家の近くに水があったけど、そうでない家は生活用水を汲みにいかないといけませんでした。

子どもが手伝いをしないと、食事の用意も間に合いませんでした。

薪割りも、子どもの仕事です。燃料屋さんから薪を買って、それを子どもが細かく割りました。

遊びと手伝いには区切りが無く、弟や妹を背中に背負って、子守りをしながら魚釣りをするといったように、工夫して手伝いの合間に遊んでいました。

ランプのホヤ磨きをする子ども（高橋余一画）
石油ランプを使った後、煤で汚れたホヤ（ガラス部分）を磨くのは子どもの仕事でした

おわりに

美濃加茂市は昭和29（1954）年に市となり、令和4（2022）年に市制68年を迎えました。美濃加茂市は南に木曽川が流れ、北は山々に囲まれた地形をしています。ときに脅威となる自然環境と共生しながら発展をしてきました。鉄道が通り、街道が道路になって橋がかかると物流の拠点や中心となる街と産業、人々の集まる場所も移り変わってきました。そうした大きな変化とともに電気が各家庭に届くようになると、日常に使う道具も変わってきました。

そうした変化の中で季節に合わせて行っていた行事を行う機会は少なくなってきました。

「みのかものうつりかわり」を調べる中で、今では写真資料でしか見ることが出来ない風景が市内に幾つもあることが今回の調査で改めてわかりました。発展してきた事だけではなく、失われた事物にも目を向け博物館史料を見たりや現地に足を運んだりしてみてください。

「みのかものうつりかわり」と、ご自身の歩みを重ね、未来の美濃加茂市を考えるきっかけとしていただければ幸いです。

木曽川の船大工（昭和28年）撮影：渡辺誠治氏

太田中学校（昭和29年）

田植えの合間に（昭和32年）撮影：渡辺誠治氏

A. 交通のうつりかわり
1. 鉄道がきて駅ができた

■鉄道の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための美濃加茂の歴史	D 写真で見る美濃加茂市50年	E 美濃加茂事典〔下線部〕
明治25	1892		飛騨小坂の町民が飛騨縦貫鉄道の運動を始める		p914			
明治43	1910		飛騨縦貫鉄道期成同盟会が飛騨三郡町村長会によって組織され、内務大臣あてに意見書を提出する		p914			
大正5	1916	1	飛騨縦貫鉄道期成同盟会が再度意見書を提出する		p914			
大正6	1917	10	飛騨小坂の町民が飛騨縦貫鉄道の運動を始める		p914			
大正7	1918	2	9日、衆議院において高山線（岐阜ー高山間）、飛越線（高山ー富山間）の鉄道敷設法案が可決される		p915			○
			鉄道敷設計画での太田駅の位置（平手）に関して、太田町各組総代が連名で「停車場位置変更」を鉄道院に願い出る		p915			
		12	「停車場位置変更」願書を取り消す		p915			
		12	東濃鉄道により軽便鉄道（多治見ー広見間）が開設される〔太多線〕		p918	p79		○
大正8	1919		春、太田駅の大部分が古井町地内になることがわかる		p915			
		5	太田町、停車場の位置を太田町地内（山之上街道の西？）にするよう陳情する　蜂屋、川辺、三和、下麻生、富田、田原、富岡、加茂野の各町村長も同調する駅の位置は旧山之上街道のすぐ東に決定される		p916			
		5	21日、高山線の敷設工事が着工する		p914			○
大正10	1921	11	12日、美濃太田駅までが開通し、美濃太田駅が開業するまだ、駅前通りはなく、旧山之上街道は混雑する〔高山線〕	p57/61/139	p916	p79/125		○
大正11	1922	11	26日、下麻生まで開通する古井駅が開業する古井駅は当初計画案にはなかったが、地元の要望によって実現した〔高山線〕	p139	p916	p79/125		○
大正12	1923	10	5日、越美南線の美濃太田・美濃町間が開通し、加茂野駅が開業する	p139	p918	p80/125		○
大正15	1926	9	25日、東濃鉄道が多治見・広見間に敷設した軽便鉄道が国営の太多線となる		p918	p80		
昭和3	1928	10	1日、太多線（多治見・美濃太田間）が開通する		p918	p80		○
昭和7	1932	4	1日、美濃太田駅西北に美濃太田機関庫が設置され、機関車の整備などが行われる		p917	p79/125		
		10	8日、名古屋鉄道（当時：名岐鉄道）犬山線から高山本線（当時：高山線）乗り入れる列車の運行が始まる					
昭和9	1934	8	16日、越美南線の美濃太田・北濃間が開通する		p918	p80/126		○
		10	25日、高山線が全通する		p917			○
昭和20	1945	8	14日、美濃太田機関区を中心に機関銃掃射の空襲を受ける 犠牲者2名	p139	p1007	p126		
昭和21	1946		お召列車で天皇が来岐する（そのときの蒸気機関車が美濃太田駅に停車する）					
昭和27	1952	7	準急行「のりくら」の運転開始〔高山線〕		p920			○
		12	26日、太多線の美濃川合駅が開業する		p918			○
		12	26日、越美南線の加茂野口駅が開業する〔加茂野駅〕	p140	p918			○
昭和31	1956	3	26日、岐阜・下呂間で、高山線初めて気動車（ディーゼル車）が運転される		p919			○
昭和33	1958	5	27日、天皇皇后両陛下、高山線を通過				p18	
			急行「ひだ」運行開始		p920			
			向龍館の「松茸の釜飯」が販売開始					
昭和40	1965	8	5日、名鉄神宮前駅・高山間に準急「たかやま」運転を開始				p36（駅前商店街）	
昭和41	1966	3	17日、美濃加茂市川合町に美濃太田気動車基地が設置される		p917	p128		
			この年、美濃太田駅乗降客のピーク（1日平均5817人）		p920			○
昭和43	1968	10	1日、特急「ひだ」運行開始同日、下呂駅発美濃太田駅行の臨時急行列車として「ライン」が運行される（1974年まで［1973年は快速列車］）〔高山線〕		p920		p18/48	○
			美濃太田駅にCTCセンター（列車集中制御装置）完成		p920	p80		
昭和44	1969	1	8日、SLさよなら列車が運転される高山線すべての列車がディーゼル車に切り替わる〔高山線〕		p920		p19/48	○
昭和45	1970	3	7日、蒸気機関車「C58」の古井小学校への引き渡し式が行われる				p20	
昭和55	1980	5	6日、電化計画が運輸大臣に認可申請をする直後に起工式が行われたものの、財政問題などから取りやめとなる					
昭和59	1984	11	3日、太田駅前広場が完成し、一般車駐車場、タクシー乗り場が設置される タイムカプセル埋設				p34	
昭和60	1985	6	5日、第一山之上街道踏切が無人となり、高山本線の手動踏切がなくなる				p35	

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和61	1986	8	26日、長良川鉄道株式会社が設立される			p80/129	p36/48	
		12	11日、国鉄越美南線が廃止、長良川鉄道が営業開始美濃太田駅と北濃駅で出発式12の駅が新設、駅名が一部変更（新設：前平公園駅、駅名の変更：加茂野駅→富加駅、加茂野口駅→加茂野駅）	p141			p36	○
昭和62	1987	4	1日、国鉄分割民営化に伴い、日本国有鉄道（国鉄）から鉄道事業を引き継いで JR東海が発足する	p141			p48	
平成3	1991	11	10日、美濃太田駅70周年記念式典とイベントが開催される				p41	
平成8	1996	10	15日、長良川鉄道10周年を迎え、1日フリー割引きっぷを発売する				p46	
平成10	1998	3	28日、美濃太田駅改築され橋上駅舎となる自由通路が開通する	p141			p48	○
		11	8日、美濃太田駅自由通路オープン記念「ゆめ・駅祭都」が開催される				p48	
平成15	2003	10	1日、特急「ひだ」定期の全列車が美濃太田駅に停車（それまでは通過列車があった）					
平成28	2016	4	27日、観光列車「ながら」運行開始「森号（1号）」「鮎号（2号）」の2両					
平成30	2018	4	18日、観光列車「ながら」運行開始「川風号（3号）」を追加					
平成31	2019	6	1日、向龍館の「松茸の釜飯」の販売が終了する （観光列車「ぬくもり飛騨路号」の運行に合わせて）					

JR太多線（旧：国鉄太多線、東濃鉄道）のできごと

長良川鉄道（旧：国鉄越美南線）のできごと

＊上記以外はJR高山本線（旧：国鉄高山線）のできごと

参考資料　A　『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B　『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C　『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D　『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

E　『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

A. 交通のうつりかわり
2. 街道が道路になり、渡しが橋に変わった

■道路や橋の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
			主要な街道、関街道・山之上街道・中山道・飛騨街道など		p899	p79		○
明治17 18	1885 1886		上古井-下古井間の道路の改修する					
明治18	1885		飛騨街道（神明-森山間）改修する		p900			○
明治21	1888		関街道（太田-関町間）改修工事		p900	p79		
明治24	1891		木製の青柳橋（森山-西脇間）が架設される	p138	p906	p79/104		○
明治28	1895		通称「中街道」（富岡村-川辺町中川辺間）が新道に変わる		p900			
明治29	1896		上古井の木曽川沿いに木曽川筏検閲所が設置される					
明治 20年代			荷車が普及する		p899			
明治 30年代			太田の渡しが混雑をきわめる（深田-土田、太田-今渡、森山-西脇が主な渡し場所）		p903			
明治32	1899		飛騨街道（加治田-神渕間）改修し完成する		p900	p124		○
明治35	1902	3	岡田式渡船（岡田只治が考案）が県下で最初に太田の渡船（太田-今渡間）に採用される （渡船料が無料となり、増水時の交通止めも解消。1日に50往復、約40㌧の輸送が可能になる）〔太田橋〕	p138	p905	p79/125		○
明治 40年頃			下麻生・太田・鵜沼の間で乗り合い馬車が使われる	p138				
明治40 以降			米国製の自転車が普及し始める		p911			
明治43	1910		人力車の需要が役人、地主層に高まり加茂郡内だけで103台を数える		p911			
明治末 期			乗合馬車（八百津-古井-太田-鵜沼間、古井-下麻生間）が走るようになる （～昭和初期まで）		p911			
大正間			道路の改修や橋の建設が進み、馬車輸送の全盛時代となる		p910			
大正1頃	1912		この頃から自動車が使われる	p139				
			この頃から村の有力者が自転車を購入するようになる （イギリス製ラージ、宮田製パーソン）		p911			
大正3	1914		志賀重昂が木曽川下りを「日本ライン」と命名する					
大正4	1915	3	交通輸送機関保有台数資料あり ＊加茂郡治要覧による		p909			
			市内の自転車保有台数、523台（そのうち古井村が最も多く125台）		p911			
大正6	1917		濃飛自動車により太田で乗合自動車（太田-岐阜間）の営業が始まる また、古井の加地タクシー（営業車3台）、井上自動車によりタクシー営業も始まる	p139	p912			
			人力車の台数が増加する （太田町11台、古井村10台、蜂屋村3台、伊深村4台、下米田村1台、加茂野村4台）		p911			
大正9	1915		交通輸送機関保有台数資料あり ＊加茂郡勢要覧による		p909			
			市内の自転車保有台数、1745台		p911			
昭和2	1927	2	10日、太田橋（午前10時渡橋式が行われる）が完成する	p139	p906	p79/125		○
			青柳橋がアーチ型鉄橋に架け替えられる		p906	p79/125		○
			岡田式渡船が廃止される	p139				
			ライン下りが始まる		p987			
昭和8	1933		太田橋から加茂川深田橋（坂祝村深田）まで新道が開かれる		p907			○
昭和 10年頃			荷馬車とトラックが併用される		p910			
昭和17	1942		戦争が激しくなり、鉄道省陸運統制令により運送会社が1地区1社に統合される 車に代用燃料が使われるようになり、木炭自動車が走る		p910			
戦前			古井駅を起点に八百津までバス営業が行われた		p912		p7	
昭和26	1951	10	濃飛自動車会社により太田線（上麻生-太田間）のバスの営業が始まる		p912		p7	
			木炭自動車が姿を消す		p910			
昭和28	1953	9	濃飛自動車会社により三和線のバスの営業が始まる（太田を起点）		p912		p7	
昭和29	1954	3	濃飛自動車会社により蜂屋線のバスの営業が始まる（太田を起点）		p912		p7	
		12	濃飛自動車会社により山之上線のバスの営業が始まる（太田を起点）		p912		p7	
昭和30	1955	1	14日、太田ー山之上、蜂屋ー加茂野、太田ー三和間のバスが開通する				p5	

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための美濃加茂の歴史	写真で見る美濃加茂市50年	美濃加茂事典〔下線部〕
昭和30	1955	1	16日、国道21号線（消防署前-太田小、神明堂-太田橋間）舗装される				p5	
昭和31	1956	3	31日、国道21号線（太田小-深田橋間）舗装される	p61		p127	p6	
		12	28日、下米田方面のバスが開通する					
昭和32	1957	5	8日、太田ー坂祝ー稲辺方面のバスが開通する				p7	
昭和33	1958	2	27日、廿屋行いのバスが開通する				p8	
		5	8日、野地原橋が竣工する				p8	
昭和34	1959	4	1日、名古屋-富山間が1級国道41号となる			p127	p9	
			中央通りが開通する		p910			
昭和35	1960	3	濃飛自動車会社により金谷線のバスの営業が始まる		p912			
		10	1日、名古屋への直通バス運行始まる				p10	
昭和36	1961	9	30日、国道21号線、元消防署前より古井・神明堂間が完全舗装される					
			国道248号の改修工事が始まる		p910			
昭和37	1962	1	25日、宝泉坊トンネルが開通する	p140	p911		p12	○
		3	9日、国道41号の太田線跨線橋が完成する				p12	
		10	23日、国道41号の美濃加茂区間（3407m）が完成する				p12	
昭和38	1963		バスの大型化をはかる		p912			
昭和41	1966	1	29日、太田と土田を結ぶ木曽川架橋の名称が「中濃大橋」に決まる				p16	○
		11	25日、国道248号が駐車禁止となり、市内の国道は全面駐車禁止となる				p16	
昭和42	1967		国道41号の全面舗装（総延長248km)が完成する		p908			
		11	15日、中濃大橋の起工式が行われる				p17	○
昭和43	1968	1	11日、青柳橋補修工事終え全面開通する				p18	
		2	19日、宝泉坊トンネル（長さ111.4m、幅6m、高さ4.5m)の改良工事が完成する		p911		p16/18	○
		3	31日、市道若宮深田線が開通				p18	
昭和44	1969	4	6日、中濃大橋（長さ380m、幅員10.25m、高さ水面より22m)が完成する（竣工式）	p140	p908	p128	p19	○
昭和45	1970	4	6日、8・17災害復旧工事で大三和橋が完成する				p20	
			自家用車の増加により、バスの運転回数減少しワンマンカーが一般化してくる		p912			
昭和46	1971	5	8日、新青柳大橋（長さ186m、幅員9.5m)が完成し、渡り初めが行われる	p140	p908	p128	p21	
昭和50	1975	12	1日、名濃バイパス（下町-若宮間）が開通する				p25	
昭和51	1976	9	11日、下米田牧野-可児町川合を結ぶ川合大橋が完成する	p141	p908	p128	p26	○
		10	江戸時代から運行されていた「川合の渡し」（県営渡船（古井町川合・可児町川合・下米田町牧野を3角に結ぶ））が廃止される（木曽川最後の県営渡船）〔川合大橋〕		p908	p128	p26	○
昭和54	1979	8	13日、山之上基幹農道工事が着工する				p29	
昭和56	1981	4	23日、飯田-根尾間の道路が国道418号に昇格する				p31	
		5	11日、塚渡陸橋完成				p31	
昭和58	1983	5	5日、三和町上川浦と上廿屋を結ぶ上水無瀬（かみみなせ）公共林道が開通する（整備完了）			p128	p33	
		7	5日、主要地方道可児兼山線（下米田地内）が完成する			p128	p33	
		11	21日、新太田橋が開通する	p141		p129	p33	
昭和61	1986	8	20日、248号バイパスの一部（県道蜂屋太田線-塚原川渡間）が供用開始				p36	
昭和63	1988	7	16日、山手陸橋が完成し、市道山手線が全面開通する			p129	p17/38	
平成2	1990	5	28日、東海環状自動車道・関-土岐間の中心くい打ち式が山之上町地内で行われる				p40	
平成4	1992	4	11日、三和町の県道神渕富加線納治バイパスが完成する				p42	
平成5	1993	5	31日、田島飛鹿線が全面開通する				p43	
平成6	1994	3	28日、国道248号バイパスの太田西工区（延長1660m）が開通する				p44	
平成9	1997	3	27日、青柳大橋（橋長88m）が開通〔青柳橋〕	p141			p17/47	○

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
平成9	1997	6	25日、旧青柳橋の撤去工事が始まる				p47	○
		10	1日、国道41号名濃バイパス立体工事で高山方面通行可能になる				p47	
平成10	1998	3	26日、国道41号名濃バイパスが完成し、名古屋方面への通行が可能になる				p48	
		4	1日、ふるさと林道（今-信友間）開通する					
平成12	2000	10	2日、市民交通機関（コミュニティバス）の「あい愛バス」運行が始まる				p7/50	
平成13	2001	4	14日、国道41号バイパスの一部（山手-山之上間）が供用開始となる				p51	
		8	20日、県道山之上古井線の山之上トンネルが開通する				p51	
平成14	2002	10	28日、国道248号太田バイパス（新太田交差点-田島町間）供用開始				p52	
平成15	2003	3	27日、正理インター線の一部(山手線-山之上町佐口間）が供用開始となる				p53	
		5	29日、下米田町信友地内から八百津町和知地内につながる、ふるさと林道・則光和知線が開通する				p53 *H15まで	
平成16	2004	11	16日、県道美濃加茂和良線「宝泉坊トンネル」が開通する					
平成17	2005	3	19日、東海環状自動車道が開通し、あわせて美濃加茂インターチェンジ・サービスエリアが開業する					
平成21	2009	3	20日、国道41号美濃加茂バイパスが川辺まで開通する	p142				

渡船、橋にかかわるできごと

参考資料

A 『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B 『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C 『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D 『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

E 『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

B. 村と町が集まって美濃加茂市ができた
1. 郡・村・町から市へ

■美濃加茂市の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
明治4	1871		岐阜県を置く			p65/123		
明治6	1873		加茂郡は十大区となる（十二の小区分割される）			p65/123		
明治7	1874	9	上下牧野村が合併する。栃井村が東西に分かれる			p67/123		
明治12	1879	3	15日、郡役所が太田に設置され、天野景昌が初代加茂郡長になる		p696	p66/124		
明治22	1889	7	1日、市町村制の公布により、太田町、古井村、山之上村、蜂屋村、伊深村、下米田村、和知村が成立する	p138	p681	p67/124		
明治30	1897	4	1日、加茂野村、三和村、坂祝村が誕生する	p138	p682	p68/124		
大正12	1923	4	1日郡制が廃止される			p125		
大正13	1924	12	1日、古井村が古井町になる	p139		p125		
昭和25	1950	8	10日、坂祝村深田が、太田町に合併する			p127		
昭和28	1953		可茂地方事務所が町村合併計画を示す			p90/127		
昭和29	1954	3	22日、美濃加茂市が誕生する	p140	p1051	p90/91/127		
			加茂郡内の太田町、古井町と山之上村、蜂屋村、加茂野村、伊深村、下米田村、三和村（鹿塩地区を除く）、和知村（大字牧野のみ）が合併		p1052	p127	p4	
		4	1日、市制施行。庁舎は旧太田役場を使用する				p4	
		4	25日、渡辺栄一が初代美濃加茂市長（旧：太田町長）となる					
		8	1日、「広報美濃加茂市」発行				p4	
昭和32			旧太田保健所を市庁舎分室として、青年婦人センター、市立図書館を設置		p1062			
昭和36	1961	5	16日、市役所の新庁舎が完成する		p1062	p91/127	p11	
昭和37	1962	10	20日、美濃加茂市の歌が制定される				p12	
昭和39	1964	1	1日、「広報みのかも」を「みのかも市報」と改め、B5判となる				p14	
		11	1日、市制施行10周年記念式典及び、市民運動会が旧古井小学校跡広場で開催される				p14	
昭和49	1974	11	10日、市制20周年記念式典が挙行される。市の木「椋」、花「あじさい」、色「コバルトブルー」を定める			p128	p24	
昭和53	1978	4	1日、市内全世帯にアンケートを実施し、市民憲章が制定される			p128	p28	
昭和54	1979	3	10日、市役所西館が完成する				p29	
昭和59	1984	11	3日、市制30周年記念式典が開催される				p34	
平成2	1990	4	2日、市役所分庁舎が完成し、建設部と水道部が業務を開始する	p141			p40	
平成6	1994	11	3日、市制40周年記念式典が開催される				p44	
平成15	2003	5	1日、市役所庁舎の耐震補強工事が始まる				p53	
平成16	2004		美濃加茂市が市制50周年を迎える	p141				
平成26	2014		美濃加茂市が市制60周年を迎える	p142				

参考資料　A　『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B　『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C　『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D　『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

E　『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

B. 村と町が集まって美濃加茂市ができた
2. 学校や公共施設ができた

■学校の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
明治5	1872	8	政府による学制発布が行われる		p930			
明治6	1973	6	市域と付近に小学義校が設立される		p933	p68		
明治8	1975		「義校」という名称が「学校」に改められる〔発蒙義校、修身義校〕		p935			○
明治10	1977		下古井が太田の学区から下古井古井学校に分離される〔古井小学校、太田小学校〕					○
明治12	1879		学制が廃止され、教育令が公布⇒義校は公立学校の性格をもつようになる		p940	p69		
明治17	1884		山之上村の修身・発蒙学校が統合して山之上学校となる〔山之上小学校、発蒙義校〕		p933/937			○
			上古井村浩然学校を古井学校と改称して下古井村古井学校を併合〔古井小学校〕		p937			○
明治19	1886		学校令が公布され、小学校から大学までが系統づけられる		p940	p69		
			小学校は尋常・高等の2科に分けられ、簡易小学校を設けることも可となる〔尋常小学校〕		p941			○
			市域の尋常小学校は太田・則光・上蜂屋の3校、簡易小学校は10校		p941			
			学校が小学校と呼ばれるようになる					
明治21	1888		今泉尋常小学校設置		p941			
明治22	1889		上下古井村の合併に伴い、字ニタ子に古井学校の校舎が新築される〔古井小学校〕					○
明治23	1890		小学校令により、尋常科は3～4年の義務制になり、小学校制度の基礎が固まる		p941			
明治29	1896	12	太田小学校が光徳(旧太田代官所跡地)に新校舎を建てて移転する		p944			○
明治32	1899		今泉小学校が新築移転		p945			
明治33	1900		改正小学校令により、尋常小学校は4年制に統一されて義務教育になる		p942			
			高等小学校が2～4年となり、のち、義務教育は4年から6年に延長される		p942			
			蜂屋小学校が新築移転		p945			
明治36	1903		山之上小・伊深小・下米田小が新築移転〔山之上小学校〕		p945			○
明治37	1904		古井小学校が校舎新築、3棟の小校舎を大校舎にする		p945/946			
明治42	1909	10	川浦、廿屋、鹿塩の小学校が合併し、三和尋常小学校となり、校舎を新築する		p943/945			
明治44	1911		蜂屋小、山之上小で校舎増築		p945			
明治45	1912		市域で初めての中等学校として群立の農林学校を設立(古井村上古井)					
			⇒大正12年(1923年)に県立に移管、岐阜県立加茂農林学校と改称					
大正元	1912	9	古井小校舎が台風で倒壊し、宮浦(現東総合グランド)に新校舎が建築される		p946			○
大正14	1925		古井実科女学校開校					
昭和10	1935		古井実科女学校が加茂農林学校に合併される					
昭和16	1941	4	国民学校令の交付により、公立の小学校は全て国民学校となる〔尋常小学校〕	p139	p965			○
			加茂野村の今泉尋常高等小学校は加茂野国民学校に改称		p965			
昭和22	1947	3・4	教育基本法制定・学校教育法施行⇒町村立の小中学校が発足する〔尋常小学校〕		p1033/1034	p90		○
昭和23	1948	3	太田中学校の独立校舎が県下に先がけて完成 加茂野中学校、伊深中学校も校舎完成		p1036	p90		
		4	下米田中学校の校舎完成		p1036			
		9	山之上中学校が新築される		p1036			
昭和24	1949	4	古井中学校の校舎完成		p1036			
			蜂屋に加茂高校定時制分校設置					
昭和27	1952		三和中と伊深中が統合し、伊深中学校、三和分教室となる		p1119			○
			蜂屋中学校の校舎完成		p1036			
			加茂高校蜂屋分校廃止 古井中学校火災					
昭和28	1953		加茂高校定時制が夜間普通科に変更される					

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和29	1954	10	加茂野小学校校舎と講堂が落成				p4	
		10	太田小に加え、古井小、山之上中でも完全給食実施へ					
昭和30	1955	5	三和小学校校舎が落成				p5	
		9	北中学校（伊深中が校名変更）が伊深町下切に新築され、開校式が行われる		p1120		p5	○
		10	山之上小学校完成（市内初の鉄筋コンクリート造）		p1116		p5	
昭和31	1956		太田中学校給食室が改修され、全校生徒に給食実施					
			蜂屋小学校の給食室が完成し、全校児童に給食実施					
昭和32	1957	3	太田中学校に屋内体操場が完成し、「軽量形鋼」工法が注目される				p6	
			東部中学校の設立が立案される〔東中学校〕		p1119			○
			下米田小に給食施設が設置され、市内16校のうち10校に完全給食					
昭和33	1958	4	蜂屋小学校屋内体操場（講堂）が完成				p8	
昭和34	1959	8	（仮称）東部中学校 上古井一之口（グンゼ東）に建築決定					
昭和35	1960	4	古井、下米田、山之上中学校が合併し、東中学校となる	p140	p1119		p10	○
		11	三和小学校廿屋分校が完成				p10	
昭和36	1961	4	県立加茂農林高等学校、加茂高校より分離独立				p11	
		7	太田小、古井小に市内初めてのプールが完成する		p1118		p11	
		9	統合東中学校の開校式が挙行される				p11	
昭和37	1962	9	東中学校新校舎が完成する				p11	○
			古井小 旧古井中跡に移転増築工事着工					
昭和38	1963	9	古井小学校の校舎増築が完了する				p13	○
		10	山之上小学校屋内体操場が完成する				p13	
昭和39	1964	12	下米田小学校の校舎が完成する	p140			p14	
昭和40	1965	1	東中学校体育館の竣工式が行われる				p15	
昭和40	1965	12	西中学校 太田町に建築決定					
昭和41	1966	4	太田中学校、加茂野中学校が合併し、西中学校となる	p140	p1119			○
		10	伊深小学校の校舎が完成し、竣工式が行われる	p140			p16	
昭和42	1967		西中学校に蜂屋中学校が統合される		p1119			○
		7	下米田小学校のプールが完成する				p17	
		9	西中学校の開校式が行われる				p17	
昭和43	1968	7	加茂野小学校のプールが完成する				p18	
		10	西中学校特別教室完成（＝全校舎完成。）校歌発表		p1119		p18	○
昭和44	1969	2	北中と富加中を統合した組合立の新中学校が発足〔双葉中学校、伊深中学校〕		p1119		p19	○
		5	古井小学校屋内体操場が完成する				p19	
		8	東中学校のプールが完成する				p19	
昭和45	1970	10	蜂屋小学校校舎の竣工式が行われる				p20	
		11	富加町に組合立双葉中学校が新築され、開校する	p140			p20	○
昭和46	1971	5	学校給食センターが完成する	p140			p21	
		7	伊深小学校のプールが完成する				p21	
昭和47	1972	2	西中学校屋内運動場が完成する				p22	
		4	双葉中学校屋内運動場が完成する				p22	○
		7	三和小学校に長さ十五メートルの簡易プールが完成する				p22	
		8	双葉中学校のプールが完成する				p22	○
昭和48	1973	3	私立美濃加茂高等学校開校				p23	

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和48	1973	7	西中学校のプールが完成する				p23	
昭和49	1974	8	蜂屋小学校のプールが完成する				p24	
昭和50	1975	4	山手小学校が開校する⇒9小学校体制に	p140	p1120		p25	
		7	三和小学校にプール（FRP製）が完成する				p25	
		7	山之上小学校のプールが完成する				p25	
昭和51	1976	7	山手小学校のプールが完成する⇒市内の学校プールの新設完了		p1118		p26	
昭和52	1977	3	伊深小学校屋内運動場の竣工式が行われる				p27	
		8	太田小学校改築に伴い、木造校舎お別れ会が開かれる				p27	
		12	加茂野小学校校舎が完成する				p27	
昭和53	1978	8	太田小学校校舎が竣工する				p28	○
昭和55	1980	2	太田小学校屋内運動場が完成する				p30	
昭和56	1981	2	下米田小学校屋内運動場、西中柔剣道場が完成する				p31	
		3	古井小学校校舎、加茂野小学校屋内運動場の竣工式が行われる				p31	
昭和57	1982	3	三和小学校に屋内運動場が完成する				p32	
		3	西中、蜂屋小特別教室棟が完成する				p32	
昭和58	1983	3	東中学校の校舎増築工事が完了する				p33	
昭和59	1984	3	蜂屋小学校屋内運動場、伊深小学校特別教室が完成する				p34	
昭和62	1987	3	山之上小学校校舎が完成する				p37	
			三和小学校木造校舎お別れ会が行われる(市内最後の木造校舎)				p24	
昭和63	1988	3	三和小学校が新築され、竣工式が行われる				p38	
		7	三和小学校のプールが完成する				p38	
平成3	1991	3	山之上小学校の屋内運動場の完成式が行われる				p41	
平成5	1993	3	東中学校体育館竣工式が行われる				p43	
平成7	1995	4	学校が完全週五日制となる				p45	
平成13	2001	4	私立美濃加茂中学校が開校する				p51	
平成15	2003	4	古井小学校に共生学級「エスペランサ」が開級する				p53	
平成16	2004		古井小学校が改築される	p141				
平成17	2005		加茂野小学校、下米田小学校が増築される	p141				
平成18	2006		蜂屋小学校が増築される	p141				
平成21	2009		給食センター「あじさいランチの森」が完成する	p141				
平成22	2010		東中学校が改築される	p142				
平成29	2017		山手小学校が増築される	p143				
			小規模特任校制度が開始され、伊深小学校、三和小学校が小規模特任校となる	p143				

参考資料　A　『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B　『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C　『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D　『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

E　『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

B. 村と町が集まって美濃加茂市ができた
2. 学校や公共施設ができた

■公共施設の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和29	1954	6	母子寮と付設保育所（後の太田第二保育所）と古井第一保育所が開設される				p4	
		11	加茂野保育所が開設される				p4	
昭和30	1955	4	牧野公民館が完成　蜂屋保育所が開設される				p5	
昭和31	1956	1	伊深保育所が開設される				p6	
		6	下米田保育所が開設される				p6	
		7	産業観光会館が太田町に落成する				p6	
昭和32	1957	5	三和保育所が開設される				p7	
		6	古井公民館および郷土館が完成する				p7	
昭和33	1958	4	山之上保育園が開設され、全市に保育園が整備される				p8	
		5	旧加茂保健所庁舎に市役所分室が設置され、福祉事務所、教育委員会がおかれる				p8	
			青年婦人センター、市立図書館が設置される	p140			p8	
昭和36	1961	5	市役所新庁舎の竣工式が行われる〔美濃加茂市庁舎〕			p90	p11	○
昭和39	1964	5	福祉会館が完成する（旧古井小校舎を一部移転し、古井神社東に）				p14	
			青年婦人センターに美濃加茂市結婚式場ができる（料金は1組1,400円）				p14	
昭和41	1966	4	母子寮付設保育園を太田第二保育園と名称変更する				p16	
昭和43	1968	10	青少年センターが完成する（旧西中太田教室を改修して）				p18	
昭和44	1969	11	市産業文化会館が完成する（木曽川河畔）〔美濃加茂市庁舎〕				p19	○
昭和45	1970	12	東公民館（下古井公民館）が完成する				p20	
昭和46	1971	10	県内初の不燃物処理場が完成する				p21	
昭和47	1972	7	中濃体育館完成	p140			p15/22	○
昭和49	1974	4	古井近隣公園オープン				p24	
			上古井公民館が完成し、「東公民館」は「下古井公民館」に名称変更				p24	
昭和51	1976	4	言語治療教室が中央公民館に開設される				p26	
		8	図書館が青少年センターから産業文化会館へ移転する				p26	
		12	県営山之上浄水場が完成し、給水を開始する	p140			p26	
昭和52	1977	4	蜂屋町に言語治療教室「カナリアの家」が完成する				p27	
昭和54	1979	3	市役所西館が完成する〔美濃加茂市庁舎〕				p29	○
		5	市立図書館が太田本町に完成する				p29	
		6	移動図書館が稼働を始める				p29	
昭和55	1980	11	文化会館が開館する	p141			p30	
			加茂総合庁舎が開館する	p141				
昭和57	1982	3	前平公園の第一期工事が完成する				p32	
		6	公民館での結婚式場の使用が廃止される				p32	
昭和58	1983	3	中央公民館・保健センターが開館する				p33	
		7	市民プールが完成する				p33	
昭和59	1984	3	美濃加茂社会保険事務所が太田町に完成し、業務を開始する				p34	
		12	前平公園の全面整備が完了する				p34	
昭和62	1987	4	新図書館がオープンする（体育館東隣りに移転新築）				p37	
		5	森山公園が開園する				p37	
		11	太田公民館が新築され、開館する				p37	

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和63	1988	3	心身障がい児通園施設「カナリアの家」が本郷町に完成する				p38	
		8	シティホテル美濃加茂がオープンする				p38	
平成2	1990	4	市役所分庁舎が完成〔美濃加茂市庁舎〕	p141			p40	○
平成3	1991	9	サンスポーツランド美濃加茂オープン（山之上町）				p41	
平成4	1992	4	美濃加茂市教育センターが中央公民館内に開所される				p42	
平成5	1993	3	牧野公民館が完成し、竣工式が行われる				p43	
平成6	1994	4	総合福祉会館「すこやかタウン美濃加茂」がオープンする	p141			p44	
平成7	1995	4	「みのかも健康の森」がオープンする	p141			p45	
平成8	1996	7	東図書館がオープンする	p141			p46	
平成10	1998	1	中濃体育館が改修され「中央体育館プラザちゅうたい」としてオープンする	p141			p48	
		4	「東山森林公園さくらの森」がオープンする				p48	
平成11	1999	4	加茂野保育所が完成し、合わせて加茂野児童館も開館する				p49	
平成12	2000	9	移動図書館「そよかぜ号」が廃止される				p50	
		10	「みのかも文化の森（市民ミュージアム・教育センター）」がオープンする	p141			p50	
			図書館での図書の宅配サービス開始				p50	
平成13	2001	4	ファミリーサポートセンターが開設される				p51	
			化石林公園が開園する				p51	
		10	「みのかも市民ボランティアセンター」がオープンする				p51	
平成14	2003		平成記念公園「日本昭和村」がオープンする					
平成16	2004	3	三和ふれあいセンターがオープンする					
		4	あじさいエコパークがオープンする（蜂屋川公共下水道が使用開始）					
平成18	2006	4	太田宿「中山道会館」がオープンする	p141				
平成19	2007	4	山之上コミュニティセンターが完成する					
平成20	2008	4	森山浄水場が完成し、運用開始する					
平成21	2009	7	多文化交流センターが中央公民館内に開設される					
		8	図書館北部分室が三和ふれあいセンター内に開設される					
平成22	2010	4	多文化交流センターが加茂川町に移転する					
平成26	2014		伊深と三和の保育園が統合し、「ほくぶ保育園」となる					
平成28	2016		加茂野交流センター「あまちの森」が開所する	p143				
平成30	2018		中之島公園が「リバーポートパーク」としてオープンする	p143				
			昭和村が「清流里山公園」としてリニューアルオープンする	p143				
令和元	2019		ヤマザキマザック工作機械博物館が開館する					
令和4	2022	1	保健センターが中部国際医療センター内「みのかも健康プラザ」へ移転する					
		4	古井第一、古井第二、蜂屋保育園が統合し、あじさい保育園となる					

参考資料　A　『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ，発行：美濃加茂市教育委員会 ，発行年：令和3（2021）年

B　『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ，発行年：昭和55（1980）年

C　『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ，発行：美濃加茂市 ，発行年：平成7（1995）年

D　『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ，発行年：平成16（2004）年

E　『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）
1. 川の近くのくらし

■川の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
明治22	1889		柴田長七、伊深天王用水を開く					
明治23	1890	1	木曽川通りの太田町が入水、堤防決壊などの被害がおこる（水害）					
明治24	1891	10	未曽有の大地震がおこる （濃尾大震災）		p991	p83		○
明治29	1896	7~9	7月に木曽川出水、8月には台風、豪雨があり太田町では県知事あてに免訴願を提出（水害）〔木曽川水害〕	p138	p994	p83		○
			上古井の木曽川沿いに木曽川筋筏検閲所が設置					
明治30	1897	9	台風による木曽川氾濫、明治時代最大の被害がおこる（風水害）〔木曽川水害〕	p138		p83		○
明治31	1898	6	集中豪雨により木曽川、飛騨川、川浦川などが出水（風水害）〔木曽川水害〕	p138	p998			○
明治32	1899	9	台風による出水、家屋倒壊の被害がおこる（風水害）〔木曽川水害〕	p138	p998			○
明治39	1906	7	飛騨川上流域などで豪雨、太田町と深田町のほぼ全戸浸水被害がおこる（風水害）〔木曽川水害〕		p998	p83		○
明治43	1910	9	集中豪雨により、廿屋・川浦川出水、三和村に被害がおこる（水害）					
大正1	1912	9	台風（大正風）により7名の死亡者がでる		p999	p84		
大正2	1913		地理学者の志賀重昂が木曽川を訪れ絶賛し、「日本ライン」と命名		p986	p80		○
大正4	1915	8	豪雨により木曽川、飛騨川が出水（水害）					
大正13	1924		「ライン下り」が本格的に始まる（土田大脇湊から犬山への遊船事業）		p987			○
昭和2	1927		「日本新八景」河川部門で木曽川が第一位に選ばれる 〔日本ライン、ライン下り〕			p80		○
昭和5	1930	7	廿屋川で大水害、山崩れが数100カ所発生する	p139				
昭和12	1937	12	飛騨川に川辺発電所完成（12月9日）					
昭和14	1939		木曽川に関西電力今渡発電所完成（3月28日）〔今渡ダム〕					○
昭和13	1938	7	木曽川で洪水がおこる 太田町がほとんど水につかる	p139				
昭和14	1939		今渡ダムの運転開始					
昭和29	1954		丸山ダムの運転開始					
昭和33	1958	9	上水道給水開始				p8	
昭和34	1959	9	伊勢湾台風により6名の死亡者がでる	p140	p1008		p9	○
昭和36	1961	6	木曽川で洪水がおこる				p11	
昭和39	1964	3	飛騨・木曽川国定公園指定		p1110		p14	○
		9	木曽川が増水、加茂川への洪水が逆流して氾濫（風水害）				p14	
昭和42	1967		木曽川右岸用水工事着工		p1169			
昭和43	1968	8	集中豪雨のため、伊深、三和で7名の死亡者がでる（8.17災害）		p1011		p18	○
昭和45	1970	8	木曽川が増水、太田町が床上浸水、蜂屋町では土砂崩れがおこる（水害）					
昭和46	1971		新丸山ダムの運転開始					
昭和51	1976	4	川合大橋が完成し、「川合の渡し」が廃止される	p141			p26	○
		9	台風17号による、市内各地で氾濫がおき、田畑の冠水などの被害がおこる（水害）				p26	
		12	県営山之上浄水場が営業給水開始				p26	
昭和55	1980	4	木曽川右岸用水が暫定通水、加茂川排水機場ができる	p141			p30	
昭和58	1983	9	太田町を中心に大洪水、被害甚大、死者1名（9.28災害）	p141			p32/33	○
昭和59	1984		木曽川で築堤工事がはじまる					
昭和63	1988	11	下水道工事着手、県の木曽川右岸流域下水道事業とあわせて工事がはじまる				p38	
昭和64	1989		木曽川の築堤工事が完成する					
平成2	1990		木曽川の堤防に遊歩道が完成する					

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
平成2	1990	6	国の天然記念物ネコギギの生態調査が川浦川で始まる				p40	○
平成4	1992	8	集中豪雨で市内各所に被害がでる(8.11集中豪雨)				p42	
平成6	1994	10	公共下水道一部供用開始				p44	
平成12	2000	9	集中豪雨により草笛町、加茂川町に浸水被害がでる				p50	
平成13	2001	4	太田橋下の木曽川河川敷に「化石林公園」が開園する				p51	
平成22	2010	7	7月15日、集中豪雨により床上・床下浸水の被害がでる	p142				
平成23	2011		台風15号により豪雨で深田町などで浸水の被害がでる	p142				
平成24	2012		日本ライン下りが休止					○
平成25	2013		伊深町に小水力発電施設完成					
平成30	2018		飛騨川上流部の集中豪雨により水質が悪化し太田、古井、下米田で断水する	p143				

参考資料　A 『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B 『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C 『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D 『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム　， 発行年：平成16（2004）年

E 『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）
2. 農家のくらし

■農業関連の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための美濃加茂の歴史	D 写真で見る美濃加茂市50年	E 美濃加茂事典〔下線部〕
明治初年			太田の福田太郎八が太田村西巾の新開地に本格的な茶園を経営したといわれる〔太田新田開発〕		p747			○
明治初期			蜂屋柿を勧業博覧会に出品し、内務卿・大久保利通から褒状を授与される		p478			
明治6	1873		オーストリアのウィーンで開かれた第6回万国博覧会に蜂屋柿が出品され、大隈重信総裁と佐野常民副総裁から表彰状を受ける		p478	p75		
明治10年代			茶の栽培が急増したが、製茶法が粗雑なため輸出できなかった。		p747	p75		
明治20年代			美濃加茂地方ではこの頃から、茶園が減りと桑園が多くなる		p743			
明治21	1888	2	28日、加茂郡茶業組合が設立（製茶技術の向上のため加茂郡に東西二つの製茶組合が設立され、市域の村は西加茂製茶組合に属するした）		p750	p75/124		
明治28	1895		加茂郡農会発足			p124		
明治33	1900		パリ万国博覧会に蜂屋柿が出品され、銀牌を受ける		p478	p75		
明治35	1902		蜂屋村で蜂屋柿販売組合が組織される		p478			
明治37	1904		セントルイス万国博覧会に蜂屋柿が出品され、干柿は金牌、苗木は銀牌を受ける		p478	p75		
明治38	1905		太田新田の開拓が本格化する		p459/460	p125		○
明治42	1909		大畑市太郎が上古井の耕地整理に取り組む	p138		p73/125		
明治43	1910		上古井の耕地整理が完了する					
明治末期			どの村でも農耕、運搬用に馬の飼育を盛んに行っていたが、道路整備が進み、鉄道が敷設されたこともあり下火になった			p76		
大正2	1913		下米田の耕地整理が完了する					
大正6	1917		畑地の30%から80%が桑園に育成されるようになる		p743(表3)	p125		
大正10年代			佐口佐太郎が柿の植樹に成功し、梨、ブドウの果樹も植えられる			p76		
大正10	1921		小作農家小作減額要求					
大正11	1922		この頃から、山之上の果実栽培が始まる	p139				
大正13	1924		山之上の上野台地の開発が始まる〔山之上果樹園〕					○
昭和初期			牛耕が普及し始め役肉牛を飼う家が増えた また、乳牛も牛乳の消費が増えるにしたがって、加茂野を中心に飼われるようになる			p76		
			山之上で柿、梨、ブドウなどの出荷が盛んになる 最盛期には鉄道の貨車で東京市場へも出荷する			p76		
			天池武義と木沢一二が椎茸の発生率10割、年中必要なときに発生させる栽培方法に成功する			p76		
戦後			三和で椎茸栽培が盛んに行われる			p76		
昭和23	1948		山之上果実農業協同組合ができる〔山之上果樹園〕	p140				○
			各町村の農業会を改組し、農業協同組合が発足する		p1084			○
昭和24	1949		太田町の耕地整理が完了する					
昭和29	1954	7	16日、市農業委員会が決定される				p4	
		11	27日、市内農畜産品評会が青年たちによって開かれる				p4	
昭和30	1955	5	24日、美濃加茂市農畜産振興会が結成される				p5	
		10	10日、「中濃地区集約酪農地域」指定により、酪農農家が増加				p5	
			放牧中の乳牛（昭和30年頃）				p26	
			ぶどうの収穫(昭和30年頃)				p27	
			三和町での椎茸栽培(昭和30年頃)				p27	
昭和31	1956	8	15日、「新農村建設地域」として太田、古井、加茂野、下米田地区が指定される				p6	
		10	14日、可茂畜産農協の家畜市場が完成し、初市が開かれる				p6	
昭和32	1957	6	30日、旧来の八農委員会が統合される				p7	
		8	11日、この頃「新農村建設地域」に第二地区（蜂屋、山之上、伊深、三和）が指定される				p7	
		8	30日、岐阜県家畜センターが完成する				p7	

和暦	西暦	月	出来事	副読本	美濃加茂市史 通史編	市民のための 美濃加茂の 歴史	写真で見る 美濃加茂市 50年	美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和33	1958	12	19日山之上農事センターが竣工し、新農村建設事業が完成する				p8	
昭和37	1962	5	2日、加茂酪農共同組合が発足する				p12	
昭和38	1963	6	5日、県畜産センター第1期工事が完了する				p13	
			しろかき風景（伊深町・昭和38年頃）				p26	
			米の脱穀風景（伊深町・昭和38年頃）				p26	
昭和39	1964	3	31日、各農業協同組合が合併し、美濃加茂市農業協同組合が発足する	p140	p1084	p128	p14	○
昭和42	1967	10	16日、山之上柿選果場が完成する				p17	
昭和43	1968	5	5日、農協会館が竣工する				p18	
昭和46	1971	3	31日、加茂野町にライスセンターが完成				p21	
昭和51	1976	7	14日、農業の近代化をめざし、下米田町に野菜ハウス団地が着工される				p26	
昭和52	1977	9	30日、下米田町に市内で二つ目となるライスセンターが完成				p26/27	
昭和55	1980	1	8日、蜂屋柿品評会が40年振りに開催				p30	
昭和61	1986	3	31日、果樹生産の安定化と集出荷体制の充実を図るため山之上果樹園に 果実集荷場が完成する				p36	
平成4	1992		農業協同組合が愛称「JA」となる					○
平成15	2003		中濃地域の5つの農協（JA中濃、JA郡上、JAおくみの、JAみのかも、JA可児）が合併し、 「めぐみの農業協同組合」となる					○

参考資料　A　『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B　『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C　『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D　『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

E　『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）
3. 工場のうつりかわり

■蚕糸業の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
明治4	1871		太田宿脇本陣役、福田太郎八が蚕種の製造をなし、近在の農家に無料で配布した（この地方での蚕種製造のはじまり）		p741			
明治14	1881		岐阜県は県内5か所に飼育技術を教えるための養蚕伝習場を開設し入所者募集始める		p736	p74		○
明治16	1883		古井に養蚕改良古井組が結成される					
明治21	1888	2	4日、（岐阜県）第一部農商課より加茂郡役所へ上古井養蚕伝習所の設置準備の指令が発せられる		p738			
			上古井養蚕伝習所が開設される		p737	p74		○
明治22	1889		伝習場の公費が打ち切られ、上古井村の大畑市太郎が私設の養蚕伝習所を設立する（5月から日誌がある）		p739			○
			渡辺道太郎（渡辺松衛の兄）、古井村に渡辺製糸場を創立する		p741	p74		○
明治24	1891		伊深村の渡辺藤助が益田郡下原村の加藤鎮之助と共同で私立養蚕模範場をつくる		p741			○
			太田町の松井左二平、自宅内に蚕室を建て私立養蚕伝習所を開設する					○
明治26	1893		松井左二平、岐阜日日新聞に蚕種製造の広告を出す		p743			○
明治29	1896		二（にびき）製糸が設立（大正2年まで）される		p742			○
明治20年代			美濃加茂地方ではこの頃から、茶園が減り桑園が多くなる					
明治30	1897	5	岸千代五郎が蜂屋村に私設養蚕伝習場を開設する					○
明治37	1904		加茂郡は日露戦争記念として桑園改良事業を補助する					○
明治44	1911		伊深村に一心館製糸が設立される。蚕糸業法発布					○
明治45	1912		渡辺松衛が「渡辺製糸場」を株式会社組織に改め、「蚕栄製糸」と改称する（富士通は撤退）					○
大正3	1914		生糸相場が暴落し、市域の製糸工場の閉鎖が増加する					
大正4	1915		一転して生糸相場上昇する					
大正5	1916		繭の収量が増加、明治30年代の約5倍となる					
大正6	1917		畑地の30%から80%が桑園に育成されるようになる		p743（表3			○
			現在の市域、太田町、伊深村を除く各町村の半数以上から多くは8割近い農家が養蚕を行う		p744（表5			
大正7	1918		蚕栄製糸（旧：渡辺製糸）が郡是製糸美濃工場に吸収合併する	p139		p75		○
			西部稚蚕飼育所が竣工する					
昭和4	1929		市域の太田・古井・山之上・蜂屋、伊深地区で繭の生産がピークとなる					
昭和5	1930		生糸が高騰し、前年春より約5割の高値となる。桑が大不足に陥る					
昭和8	1933		郡是製糸美濃工場、生糸生産量のピーク（49305貫）となる					○
昭和47	1972		郡是製糸美濃工場が操業停止					○
昭和50	1975		壮蚕共同飼育（昭和50年頃）					

参考資料
A 『わたしたちのまち 美濃加茂』 編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年
B 『美濃加茂市史～通史編～』 編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年
C 『市民のための美濃加茂の歴史』 編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年
D 『写真で見る美濃加茂50年史』 編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年
E 『美濃加茂事典』 http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm 令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）
3. 工場のうつりかわり

■工場の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
大正3	1914		生糸相場が暴落し、市域の製糸工場の閉鎖が増加する		p859/860			
大正7	1918		蚕栄製糸（旧：渡辺製糸）が郡是製糸美濃工場に吸収合併する〔養蚕〕	p139	p861～865	p75		○
昭和5	1930		上古井・森山に井村洋傘木柄工場が創業される					
昭和30	1955		岐阜県が美濃加茂市を工場適地として選定・紹介		p1098			
昭和31	1956		市工場誘致条例を制定		p1098		p12	
昭和32	1957		市誘致工場の第一号として佐藤化学が進出する		p1098			
昭和37	1962		誘致工場6社の合同調印が行われる（ニ村化学工業など）〔日立製作所岐阜工場〕		p1098		p12	○
			美濃加茂市が「低開発地域工業開発促進法」の適用地域に指定される					
昭和40	1965		若尾秀雄が美濃加茂市本郷町に古井第一工場を竣工（現タンドール製菓）					
昭和44	1969		日立製作所岐阜工場（現・マクセルフロンティア岐阜事業所）が進出		p1101		p12/19	○
昭和47	1972		郡是製糸美濃工場が操業停止				p12	○
昭和48	1973		千代田アルミニウム製缶（現・ユニバーサル製缶岐阜工場）が進出		p1101		p12	
昭和55	1980		山崎鉄工所（現・ヤマザキマザック美濃加茂）が進出				p12	
			ソニー美濃加茂（現・ソニーイーエムシーエス美濃加茂サイト）が進出				p12	
昭和59	1984		富士通VLSI岐阜事業所が進出				p12	
平成17	2005		富士通とヤマザキマザック美濃加茂製作所の間で工場用地の売買契約締結（富士通は撤退）					
平成19	2007		モンテール美濃加茂工場竣工					
平成20	2008		蜂屋台工業団地の企業立地が完了する					
平成21	2009		パナソニックエレクトロニックデバイス岐阜工場が閉鎖					
平成24	2012		蜂屋台工業団地が完成する					
平成25	2013	3	ソニーイーエムシーエス美濃加茂サイトが閉鎖					
平成26	2014		ミツカン美濃加茂工場竣工					
令和元	2019	11	ヤマザキマザック工作機械博物館 開館					

参考資料　A 『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ，発行：美濃加茂市教育委員会 ，発行年：令和3（2021）年

B 『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ，発行年：昭和55（1980）年

C 『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ，発行：美濃加茂市 ，発行年：平成7（1995）年

D 『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ，発行年：平成16（2004）年

E 『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）
4. 人がたくさん住むところ

■団地や住宅地の年表

和暦	西暦	月	出来事	出典 A 副読本	B 美濃加茂市史 通史編	C 市民のための 美濃加茂の 歴史	D 写真で見る 美濃加茂市 50年	E 美濃加茂 事典 〔下線部〕
昭和27	1952	2	2月、公営住宅が太田町トドメキに6戸（木造平屋）建設される		p1150			
昭和28	1953		公営住宅が太田町平塚に10戸（木造平屋）建設される		p1151			
			公営住宅が本郷入会に5戸建設（木造平屋）される		p1151			
昭和29	1954		市営住宅が太田町平塚に10戸（特耐平屋）建設される		p1151			
			市営住宅が本郷入会に5戸建設（木造平屋）される		p1151			
			市営住宅が蜂屋町引田に10戸（木造平屋）建設される		p1151			
			市営住宅が太田町深田に10戸（木造平屋）建設される		p1151			
昭和30	1955		市営住宅が太田町平塚に8戸（簡耐2階）建設される		p1151			
			市営住宅が森山町上野に10戸（木造平屋）建設される		p1151			
			市営住宅が森山町上野に4戸（簡耐平屋）建設される		p1151			
			市営住宅が森山町上野に4戸（簡耐平屋）建設される		p1151			
			古井地内市営住宅のようす				p22	
昭和41	1966		岐阜県住宅供給公社が設立される〔森山団地〕					○
		8	25日、岐阜県住宅供給公社による新池団地が一部完成し、申し込み受付が開始される 75戸（木造平屋）		p1151		p16	
			公団住宅（雇用促進住宅美濃加茂宿舎）が川合町に建設される 4階建が2棟（80世帯）		p1151			
昭和42	1967	7	3日、新池団地が全戸完成し募集が開始される				p17	
			市営住宅が下米田牧野に10戸（特耐2階）建設される		p1151			
昭和46	1971		公団住宅（雇用促進住宅境松宿舎）が太田町境松に建設される 5階建が1棟（80世帯）		p1151			
昭和47	1972	10	27日、森山住宅団地の造成がはじまる（500戸）〔森山団地〕		p1151		p22	○
昭和48	1973	3	12日、県住宅供給公社の森山団地入居者受付開始				p23	
昭和50	1975		市営住宅が下米田引田に10戸建設される		p1151			
昭和51	1976		森山団地の分譲が開始される		p1151			
昭和53	1978		市営住宅が古井町相生に18戸建設される					
昭和54	1979		市営住宅が古井町上野に24戸建設される					
昭和55	1980		市営住宅が蜂屋町矢田に18戸建設される					
昭和56	1981		市営住宅が太田下町に16戸建設される					
昭和57	1982		市営住宅が太田町平塚Aに22戸建設される					
昭和58	1983		市営住宅が太田町平塚Bに16戸建設される					
昭和62	1987		市営住宅が太田町トドメキに12戸建設される					
昭和63	1988		市営住宅が蜂屋町矢田に「ハイツ矢田ABC」が建設される 平成2年にかけて72戸					
平成元	1989		市営住宅が伊深に建設される 平成2年にかけて20戸					
平成3	1991		市営住宅が古井町森山に6戸建設される					
平成3	1992		市営住宅が下米田牧野に12戸建設される					
平成9	1997	4	1日、三和市営住宅への入居が始まる (平成8年から18戸の建設が始まる)				p47	
平成11	1999		市営住宅が蜂屋町土ヶ洞に12戸建設される					
平成14	2002	5	11日、中部台の街開き				p52	

参考資料　A　『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集：美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会 ， 発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：令和3（2021）年

B　『美濃加茂市史～通史編～』　編集・発行：美濃加茂市 ， 発行年：昭和55（1980）年

C　『市民のための美濃加茂の歴史』　編集：美濃加茂市教育委員会 ， 発行：美濃加茂市 ， 発行年：平成7（1995）年

D　『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

E　『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4（2022）年1月28日アクセス
※「出来事」欄の下線部の語句で検索

参考資料一覧

全体

『わたしたちのまち 美濃加茂』　編集:美濃加茂市小学校社会科副読本編集委員会,発行:美濃加茂市教育委員会,発行年:令和3(2021)年

『美濃加茂市史〜通史編〜』　編集・発行:美濃加茂市,発行年:昭和55(1980)年

『市民のための美濃加茂の歴史』　編集:美濃加茂市教育委員会 , 発行:美濃加茂市 , 発行年:平成7(1995)年

『写真で見る美濃加茂50年史』　編集・発行:美濃加茂市民ミュージアム , 発行年:平成16(2004)年

みのかも文化の森HPコンテンツ
『美濃加茂事典』　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/m_dictionary/index.cfm　令和4(2022)年2月1日アクセス

A. 交通のうつりかわり

1、鉄道がきて駅ができた
2、街道が道路になり、渡しが橋に変わった
3、みのかもの観光

『写真集 美濃加茂』　編著:美濃加茂写真集編集委員会 , 発行:創文出版社 , 発行年:昭和61(1986)年

『写真アルバム 可児・加茂の昭和』　発行:樹林舎 , 発行年:令和3(2021)年

『鉄道のまち展 展示図録』　編集・発行:美濃加茂市民ミュージアム , 発行年:令和3(2021)年

『美濃加茂市統計書(令和2年度版)』　発行:美濃加茂市 , 発行年:令和3(2021)年

みのかも文化の森HPコンテンツ
「美濃加茂のあゆみ 市制60年のあゆみ」　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/data_box/shimin/nenpyou.pdf　令和4(2022)2月1日アクセス

B. 村と町が集まって美濃加茂市ができた

1、郡・村・町から市へ

『写真集 美濃加茂』　編著:美濃加茂写真集編集委員会 , 発行:創文出版社 , 発行年:昭和61(1986)年

『写真アルバム 可児・加茂の昭和』　発行:樹林舎 , 発行年:令和3(2021)年

みのかも文化の森HPコンテンツ
「美濃加茂のあゆみ 市制60年のあゆみ」　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/data_box/shimin/nenpyou.pdf　令和4(2022)2月1日アクセス

2、学校や公共施設ができた

『写真アルバム 可児・加茂の昭和』　発行:樹林舎 , 発行年:令和3(2021)年

『写真で見る太田小学校百年史』　発行:美濃加茂市立太田小学校 , 発行年:昭和53(1978)年

『太中十年の歩み』　編集・発行:丹羽 平一 , 発行年:昭和33(1958)年

『古井小学校開校百周年記念誌』　発行:百周年記念事業委員会 , 発行年:昭和48(1973)年

『美濃加茂市立加野茂小学校 百年のあゆみ』　編集・発行:加茂野小学校開校百年記念事業委員会 , 発行年:昭和53(1978)年

『三和小創立100周年記念誌』　編集・発行:三和小創立100周年記念事業を進める会　発行年:平成21(2009)年

みのかも文化の森HPコンテンツ
「美濃加茂のあゆみ 市制60年のあゆみ」　http://www.forest.minokamo.gifu.jp/data_box/shimin/nenpyou.pdf　令和4(2022)2月1日アクセス

3、みのかも小学生

『写真アルバム 可児・加茂の昭和』　発行:樹林舎 , 発行年:令和3(2021)年

『美濃生活絵巻』上・中・下　絵・文:高橋余一 , 発行:株式会社国書刊行会 , 発行年:平成2(1990)年

昭和のくらし体験集3『子どもの頃の遊びの思い出』　編集:みのかも文化の森・生活体験ボランティア , 発行:美濃加茂市民ミュージアム , 発行年:平成18(2006)年

平成24年度 四季を食べる講座「昭和の給食」　発行:みのかも文化の森・伝承料理の会　発行年:平成24(2012)年

C. みのかものいろいろなくらし（土地利用）

1、川の近くのくらし

『川とともに生きる』
（美濃加茂ふるさとフィルNo. 3）
美濃加茂市民ミュージアム紀要第10集
『川の思い出調査の概要と同2010事業の報告』
『川浦川の生きものたち』
（美濃加茂ふるさとファイルNo. 8）

編集・発行：美濃加茂市教育委員会 社会教育課 ， 発行年：平成4（1992）年

文：藤村 俊 ， 編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成23（2011）年

編集・発行：美濃加茂市教育委員会 ， 発行年：平成11（1999）年

2、農家のくらし

『写真アルバム 可児・加茂の昭和』

発行：樹林舎 ， 発行年：令和3（2021）年

3、工場のうつりかわり

『生活絵巻に見る高橋余一のまなざし』
（美濃加茂ふるさとファイルNo. 9）

編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成13（2001）年

4、人がたくさん住むところ

『美濃加茂市統計書（令和2年度版）』

発行：美濃加茂市 ， 発行年：令和3（2021）年

みのかも文化の森HPコンテンツ
「美濃加茂のあゆみ 市制60年のあゆみ」

http://www.forest.minokamo.gifu.jp/data_box/shimin/nenpyou.pdf 令和4（2022）2月1日アクセス

D. 道具のうつりかわりと今

1、電気のあるくらし
2、洗濯の道具が変わった
3、食事が変わった
4、みのかもの年中行事
5、昔のくらしの知恵

『美濃生活絵巻』上・中・下

絵・文：高橋余一 ， 発行：株式会社国書刊行会 ， 発行年：平成2（1990）年

『生活絵巻に見る高橋余一のまなざし』
（美濃加茂ふるさとファイルNo. 9）

編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成13（2001）年

『ていねいな暮らしのあったころ』
（美濃加茂ふるさとファイルNo. 14）

編集・発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 印刷：株式会社岐阜文芸社 ， 発行年：平成21（2009）年

昭和のくらし体験集1『昭和前・中期のお手伝い』

編集：みのかも文化の森・生活体験ボランティア ， 発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

昭和のくらし体験集2『子どもの頃の思い出の味』

編集：みのかも文化の森・生活体験ボランティア ， 発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成16（2004）年

昭和のくらし体験集3『子どもの頃の遊びの思い出』

編集：みのかも文化の森・生活体験ボランティア ， 発行：美濃加茂市民ミュージアム ， 発行年：平成18（2006）年

みのかも文化の森HPコンテンツ
「文化の森コレクション 昔のくらしの道具」

http://www.forest.minokamo.gifu.jp/data_box/dougu/index.html 令和4（2022）年2月1日アクセス

みのかも文化の森HPコンテンツ
「文化の森コレクション 図鑑的昭和生活」

http://www.forest.minokamo.gifu.jp/nouson/index.cfm 令和4（2022）年2月1日アクセス

みのかも文化の森HPコンテンツ
「広報みのかも特集記事
ていねいな暮らしのあったころ」

http://www.forest.minokamo.gifu.jp/cultural/tokusyuu_kiji/12teineina_kurashi/index.cfm
令和4（2022）年2月1日アクセス

みのかも文化の森HPコンテンツ
「広報みのかも特集記事 高橋余一の生活絵巻」

http://www.forest.minokamo.gifu.jp/cultural/tokusyuu_kiji/14takahashiyoichi_seikatsuemaki/
令和4（2022）年2月1日アクセス

担当

A.
1.2.　渡辺 崇
3.　可児 光生

B.
1.　渡辺 崇
2.3.　石田 真未

C.
1.　甲斐 規予子
2.　渡辺 崇
3.　甲斐 規予子
4.　石田 真未

D.
1.2.3.4.5.甲斐 規予子

表紙･イラスト 渡辺 崇

＊年表は各項目の担当者が作成した

みのかもの文化の森/美濃加茂市民ミュージアム
「みのかものうつりかわり」
令和4（2022）年3月31日　発行
編集・発行　みのかもの文化の森/美濃加茂市民ミュージアム
〒505-0004 岐阜県美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1
Tel:0574-28-1110 Fax:0574-28-1104
http://www.forest.minokamo.gifu.jp/

祝